

41536

教科書文庫

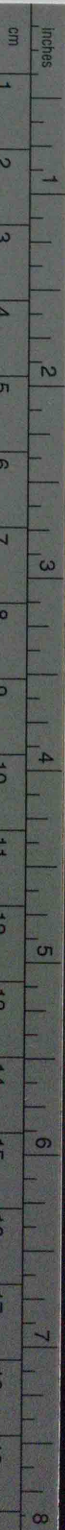
4
810
41-1916
2000302693

Kodak Gray Scale



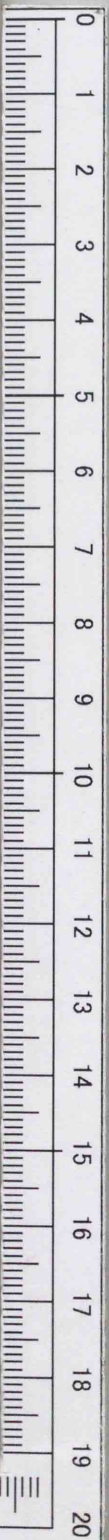
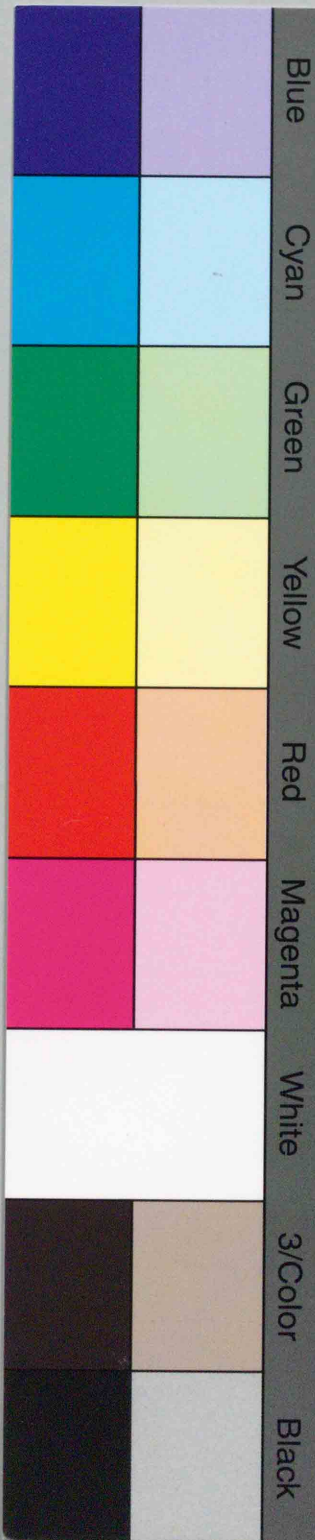
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

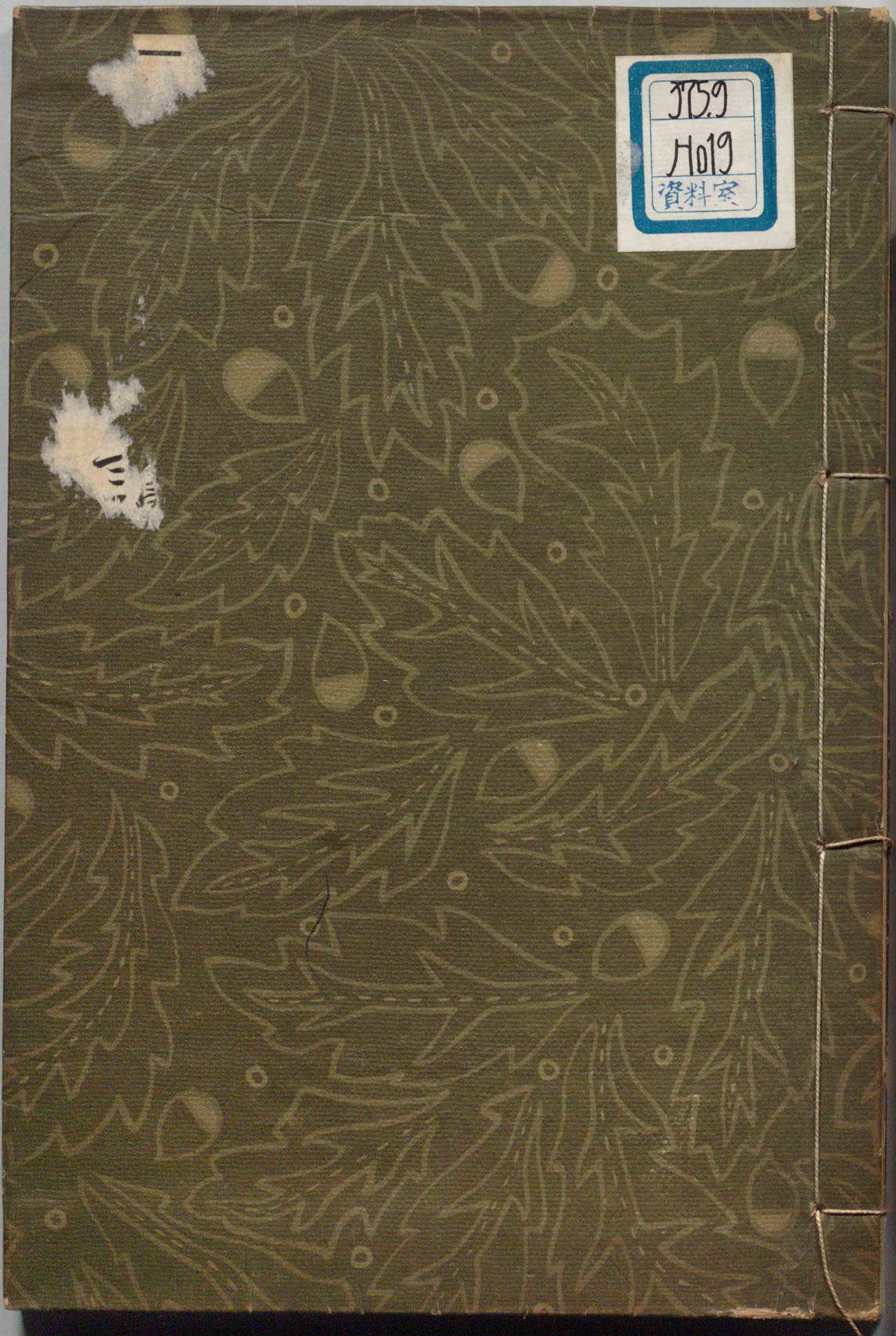


Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



359
H019
資料室



資料室

日六十二月二十年五正大

濟定檢省部文

用科教科語國校學中

3759

H019

保科孝一編

廣島大學
大正國語讀本



東京
會社資育英書院發兌

大正國語讀本 卷十

目次

- 一 神武天皇その一……………新保磐次…一
- 二 神武天皇その二…………………………七
- 三 人生の快事その一……………三宅雪嶺…一一
- 四 人生の快事その二…………………………一六
- 五 人生の快事その三…………………………二二
- 六 萬葉集の歌(韻文)……………(萬葉集)…二七
- 七 秋思の瞑想……………網島梁川…三二
- 八 近世の儒學……………(日本儒學史)…三六

目次

一

九 王陽明の大悟……………高瀬武次郎…四四

一〇 月は世々の形見……………室鳩巢…五〇

一一 月花のことわり……………村田春海…五六

一二 靈は亡びず……………タゴール…五九

一三 安宅その一(謠曲)……………六八

一四 安宅その二……………七三

一五 安宅その三……………七九

一六 箱根山……………賀茂真淵…八四

一七 菅公の左遷……………(大鏡)…八七

一八 赦文……………(平家物語)…九四

一九 鬼界が島……………(平家物語)…一〇一

二〇 學制に關する意見書……………橋本景岳…一〇七

二一 萬里の長城(韻文)……………土井晩翠…一二七

二二 曾我會稽山その一……………近松門左衛門…一二七

二三 曾我會稽山その二……………一三二

二四 大日本史論贊……………(大日本史論贊集)…一四〇

大正國語讀本卷十

一 神武天皇その一

新保磐次

宇陀
大和國宇陀郡
にあり。

こゝに^{*}宇陀の兄猾弟猾といふ酋長あり。天皇先づ八咫鳥を遣して、その向背を問はしめ給ふに、兄猾は鳴鏑を發ちて御使を追返しき。さて兄猾は味方の兵を集めしに、はかばかしく集らざりしかば、偽りて降參の由を申し、新に宮殿を作り、密かに陷奔を設けて、天皇を迎へ奉らんと謀れり。弟猾早くより歸順の志を抱きければ、その事を皇軍に密告し



道臣命
大伴氏の祖。
大來目命
久米氏の祖。

けり。之に因つて道臣命は大來目命と共に、御先發として
兄猾が許に赴きて諸聲鋭く、おのれが調進したる新殿は、お
のれ先づ御毒味仕れ。」と。劔を按じ矢を注して、左右より詰
め寄せ、兄猾を陷穽に追入れてこれを殺しき。大來目命は
天孫降臨の折その先鋒をつかまつりし、天津來目命の子孫
なり。

兄猾既に誅に伏しければ、弟猾大いに酒食を設けて皇軍を
饗應す。天皇御氣色美しく御歌をよませ給ふ。

「宇陀の高城に鳴羅張る 我が待つや鳴は障らず

いすくはし鯨さやる

前妻が魚乞はさば たちそばの實のなけくを

こきだひゑね

後妻が魚乞はさば いちさかきみの多けくを

こきだひゑね

え、しや可笑しや あ、しや可笑しや

御歌の心は、兄猾が鳴を取らんとて網を張りしに、鳴にはあ
らで、偉大なる鯨のかゝりしはさぞ意外ならん。誰にもあ
れ、魚の欲しきものあらば、何程にても遣らうぞ。」と、まだ餘勇
あるを示し給へるものなるべし。こは來目歌とて、今も宮
中の紀元節の式祭には、此の歌を歌ひて舞ふなり。伴奏は
横笛、箏、篳、和琴にて、劔を抜いて舞ひながら退出する勇壯古
雅なる舞樂なり。

國見岳
大和國宇陀郡
に在り、

磯城
同國磯城郡
に在り。

磐余
大和國磯城郡
に在り。

葛城
大和國南葛城
郡に在り。

天皇宇陀より吉野へ巡幸し給ふ時、尾ある人、井の中より出でて迎へ奉る、その名を井光といふ。更に少しく進み給へば、又尾ある人あり、磐を押分けて出で、臣は磐排別の子なり。と申す。蓋しこれ穴居の民にして、こゝに井といへるは後世考古學者が謂ふ所の堅穴ならんといふ者あり。然らば磐を押分けたるは横穴より出でたるなるべし。とにかくに上古穴居の民のありしことは、今猶古史と遺跡とに明かなり。

墨坂
大和國宇陀郡
に在り。

椎根津彦
一名神知津彦。初名珍彦といふ。武東征の時速吸門にて帝に謁し臣となる。

陀より西へ通ずべき女阪には女軍を置き、男阪には男軍を置き、墨坂には盛に炭火をおこして防禦せり。かゝる程に天皇の御夢に天神の教へ給ふやう、天香山の土を取りて祭器を造り、天神地祇を祭り給は、虜兵は忽ち平ぐべし。と。然るに弟猾の奏する所亦同じかりしかば、天皇大いに喜び給ひ、椎根津彦に破れたる衣服、蓑笠を著せて老翁に扮たせ、弟猾をば老婆の姿に扮たせ、敵地を過ぎて天香山に遣し給ひき。虜兵二人を見て大いに笑ひ、あな醜くの爺婆や。とて、皆鼻を掩ひ道を開きて通しければ、二人は安々と天香山の土を取りて歸りぬ。

天皇即ち此の土を以て平瓮、巖瓮等の祭器を造りて、御自ら

神祇を祭り、先づ國見岳の八十梟帥を討平げ給ひき。それより磯城方面に進發し給ひしに、忍阪の大室といふ大土窟に八十梟帥等群集せり。天皇謀りて八十梟帥等に饗宴を賜ひ、大來目命の部下なる來目部の勇士を膳夫に仕立てて、各頭椎カサヅメの劔を帶せしめ、八十膳夫と稱して、八十梟帥一人毎に一人を付けて給仕せしむ。兼ねて謀りしことなれば、酒酣なる時道臣命立ちて歌ふ、其の歌、

忍阪の大室屋に

人さはに來入り居り

人さはに入り居りとも

みつゝし來目の子が

頭椎石椎イシヅメもち

打ちてし止まむ

みつゝし來目の子らが

頭椎石椎もち

今打たば宜らし

と歌ひ終るを相圖に八十膳夫は一齊に劔を抜いて八十梟帥を殺し盡しぬ。皇軍勢に乗じて遂に兄磯城等を平げ、磯城以南の地皆定まりぬ。頭椎とは劔の柄頭太くして椎の如きなり。

二 神武天皇その二

南方既に定まりければ、天皇諸軍を率ゐて長髓彦を登美トモミに討ち給ふ。今や皇軍漸く地の利を得て進むと雖も、長髓彦は土豪中の最も強雄なるものにして、手痛く戦ひければ皇軍容易く勝つこと能はず、剩へ天暗く氷雨ふりて、皇軍疲れ

登美
大和國磯城郡
にあり。

困しめり。時に金色の鵝飛來りて天皇の御弓の弭に止り、其の光電の如くなりければ、長髓彦が士卒驚き異みて、氣勢頓に挫け、皇軍の勇氣再び加りぬ。明治勅定の金鵝勳章の故事はこれより出でたり。

只これのみにあらず、往にし孔舍衙阪の戦に、五瀬命の敢なく討たれ給ひしことを、天皇よに口惜しく思召し、

みつゝし

久米の子らが垣本に

植ゑし薑口ひゞく

吾は忘れじ打ちてし止まむ

口に痛かりし薑の辛さを永く忘れず、必ず此の敵を亡さんと悲歌慷慨し給ひければ、將卒皆奮勇して其の身を忘れ、軍氣日に振へり。

孔舍衙阪
河内國中河内
郡に在り。
五瀬命
神武天皇の皇
兄。

されば流石の長髓彦も心漸く穩かならず、使者を以て天皇に申すやう、長髓彦敢て故なく貴命を拒むにあらず。先に天神の御子あり、天の磐船に乗りて天降り給へり。名を櫛玉饒速日命と申し、吾が妹三炊屋姫を娶りて御子可美眞手命を生み給ふ、これ長髓彦が君として忠勤を致す所なり。それ天神の御子豈二種あらんや。如何ぞ更に天神の子と稱して人の國を奪はんとせらるゝぞ、其の旨趣を承はらん。」とぞ申入れける。天皇答へ給はく、天神の御子亦多し。汝が君とする所實に天神の御子ならば、その寶とすべき物を見せよ。」と。長髓彦乃ち饒速日命の天羽々矢と歩鞞カチとを持ユキたせて叡覽に入れけるに、いかにも天上の製作なりければ、

天皇また御物の天羽々矢と步鞞とを長髓彦に見せ給ふ。長髓彦之を見て其の製作の更に高貴なるにや驚きけん、心安からぬさま著しく見えけれど、虎に騎る勢は今更とゞむべからず。饒速日命は天皇の正統なるを知りて長髓彦に歸順を勸むれども、彼が頑なる心は容易に飜るべくもあらず。饒速日命到底其の諭し難きを見て、遂に長髓彦を殺して歸順しけり。

皇軍それより大和の北部、添葛城の地方に行向ひ未だ敢て歸順せざりける強勇なる土蜘蛛を討ちて盡く之を征服し、中州こゝに平定せり。

天皇日向の海隅より興りて、遂に一統の大業を建て給ひし

雄才武略は今更申さんも畏し。たゞ天皇の文藻英發に至りては、古今之を言ふ者なし。前に擧げたる「宇陀の高城」の御製又は、垣本に植ゑし薑口ひゞくの御製を初め、日本書紀及び古事記の傳ふる所の歌章、何れも眞情流露し、特に格調の雄壯に至りては、吾が文學史中前後之に比すべきものなし。天皇の如きは實に聖文神武、古今に超絶すと申し奉るべきなり。(趣味の日本史)

三 人生の快事その一 三 宅 雪 嶺

「大上有立德、其次有立功、其次有立言、雖久不廢、此之謂不朽」と曰へるは、左傳に出づ。穆叔の語。穆叔以前より行はれたりし格言なるべく、穆叔以

Homer
(Homeros)

後數千年を経て變ぜず。註に立德は黃帝・堯・舜、立功は禹・稷、立言は史佚・周任・臧文仲とあり。他の例を擧ぐれば、孔子・釋迦・耶蘇の如きを立德とし、該撒・奈破崙の如きを立功とし、ホーマー以下の文學者を立言とすべし。この三不朽を智仁勇の達徳に配當せば、立德は仁、立功は勇、而して立言は智なり。立功にも智を要し、立言にも勇を要すれど、主要なるものを擧ぐれば各、特色あり。中に史的の意義ありて現代に認むるを難んずるは立德なり。現に立功家及び立言家の少からざるに、稱して立德家とすべきものを何處に見るか。立功及び立言は全く現實の事にして、過去にもあれば、現在にもあり、將來にもあるべく、立德の漠然たるが如くならず。

魏の文帝
魏の曹丕。

Voltaire

今は立德の形跡あるものも、立功と立言との孰れかに屬すべきが如し。三不朽の中、立德は人の欲求する所の絶頂にして、聖たり佛たるは人生第一の快事なるかに考へらるれど、箒木の如く之を求めて遂に見失ふに終らん。現代の人の志す所は立功ならざれば立言なり。魏の文帝曰く、「年壽有時而盡、榮樂止於其身。二者必至之常期、未若文章之無窮」と。是、文事に與る者の期せずして考へ及ぶ所にして、筆は劍より強し」といふも、其の旨相近し。ヴォルテール曰く、「功名心ある者にして悉く目的を達し得べくば、悉く文字の人となるべし」と。ホーマーは傳明かならざれど、傳説に依れば、琴を携へて人の門前に立ち、且謠ひ且

語れる者なりといふ。明を失ひしが上門附の如く絃歌して錢を乞ひしものならば、苦痛なる生活を送りしなるべきに、後世之を歎美して已まず、彼の如くんば、死すとも可なりと考ふるもの常にこれあり。凡そ苦心慘澹の甚だしきこと、詩人の句を撰するが如きは少し。司馬相如の子虚賦、左思の三都賦、辭を練るに全力を用ひき。杜少陵が爲人性癖耽佳句、句不驚人死不休といへる、眞に實狀なり。幾多詩人中には、強ち人を驚かさんとせず、或は之を喜ばしめんとし、或は之を悲しましめんとし、或は之を別乾坤に導かんとするもあるべけれど、要するに皆多少目的を達する所に愉快を感じ、洛陽の紙價を貴くせる時、誠に大勝利を得たる如く

司馬相如
漢の詩人。
五百年代の
人。
左思
晉の詩人。

杜少陵
唐の詩人。
名は甫。

人間知己少
村上佛山の
句。

賈誼
漢の文人。
蘇軾
宋の文人。

Macaulay
Carlyle
Frederick

悦びたるならん。己の以て絶佳とする所、人全く解せず、外に出でて衆に笑はれ、内に入りて米鹽に窮する時、若し猶自ら信ずること篤くば、當世に屈して後世に伸ぶるあるを以て慰めたるべし。又實に當世に屈して後世に伸ぶるものあり。「人間知己少、破硯是良朋」といへるは、知己の少くして愈、得意を感じざるなり。

賈誼、蘇軾の策論は正しく立言なり。世に論文と稱するは皆然り。論文といふも全篇悉く議論より成るとは限らず、或は議論を敘事の間、或は議論を挿まずして自然に主張たるあり。マコーレーの英國史は歴史にして自由主義を鼓吹し、カーライルのフレデリック傳は傳記にし

て人格の堅實を獎勵せるなり。東洋の史傳は皆多少主張あり。爲に史實を枉ぐとの非難あれど、史實を枉げずして主張するを得ずとは謂ふべからず。

四 人生の快事その二

形を異にして實を同じくするは、詩と藝術、文と科學なり。

Michael angelo
言は意を云々。
易經に、「書不盡言、言不盡意。」

「言は意を盡さず、文は言を盡さず」といへり。立言は即ち立意にして、凡そ目的を達し得るものは、宜しく立言と見るべし。藝術家の製作に従事するは、樂しきか、樂しからざるか、樂しくとも、世間の想像する所とは同じからじ。ミケランゼロの工場に入りしものは、彼の努力に驚かざるなし。夜

Sistin chapel

Darwin
Shakespeare
Archimedes

更けて眠りしかと思へば、突然起きて頭に蠟燭を翳し、著手しつゝある製作に従事す。シスト禮拜堂の天井畫を完成せし時、絶えず仰ぎ居りしが爲に頸が曲らざりきといふ。上下に重んぜられて、生活も豊かなりしが、肉體の満足を事とせず、繪畫及び彫刻に汲々たりしは、苦心慘澹の間に漸く理想に近づく愉快の禁じ得ざるものありしに因りてなり。科學家は天地の美を讚歎せず。世間に美として讚歎する所も嚴密に分解し、眼中美もなく醜もなし。ダーウインは自ら歎じて曰ふ、「吾はシェイクスピアを讀みて少しも興味を感じず」と。初より感ぜざりしに非ず、生物の研究を専らにし、遂に之を感じざるに至りしなり。アルキミデスは兵

英雄何必云々
清の鄭板橋の
句。
大丈夫云々
後漢の馬援の
語

卒に襲はれし時、正に沙上に幾何學の圖を描きて、一意研究しつゝあり。兵卒を顧みて曰ふ、暫く待て。問題を決せん。と言ひ終らずして殺さる。傳説にてはあれど、科學家の研究に専らなること往々此の如きものあり。眞に研究を念とするものは、必ず別に楽しむ所あり。常人の楽しむ所と異なり。稱して楽しむといふべからずんば、他の何物にも代ふべからざる方針を取りて進みつゝありと謂ふべし。「英雄何必讀書史」とは單に東洋のみならず、何處にも言ひふるしたることなり。泰平無事の日には斯く考ふる者多からざれど、警報傳はりて多少世間の動搖する時には、風雲に際會すといふを事實にせんと欲し、曰く、大丈夫當に屍を馬

男兒當に云々
事文類聚別集
に出づ。

革に裹むべし。曰く、男兒當に天下に横行して富貴を取るべし。と。出でては將入りては相若し之を併せ得ること困難ならば、せめて其の一を得るの愉快なるべきを思ひ、軍人たらんか、政治家たらんか、遠きは歴山アレキサンデル、近きは奈破崙、人生れて彼の如くなるを得ば、萬死して憾なしとす。其の何が望ましきかと問へば、言ふまでもなく天下を掌にし、事として意の如くならざるなきに在れど、彼等果して世人の想像するが如く愉快を感じたりしか。歴山は天真爛漫、直情徑行、一切の偽善を憎み、波斯に遠征して波斯の歡樂に耽りしに似たれど、彼は苟も無道といふを敢てせず。當時の社會情態より考ふれば、身を律するの嚴なりしを認めざる能はず。

彼の愉快を感じずるは富貴に在らず、無上の權を振ふに在り。歳三十にて歿し、能く彼の如きを致したるは偶然にあらず。奈破崙の幸福なるは十七歳までなりといふものあるは、即ち爾後野心に驅られて東奔西走し、一日も心の安寧を得ざりしを指すなり。されど奈破崙の愉快を感じるは、安樂の生活より寧ろ南征北伐の間に存せずや。肉體に苦痛あれど、己の力を伸し得る處に満足を感じたるならん。彼は一種の理想に生き、之に近づくを以て満足せしもの、その羅馬を模範とし、世界地圖を改め、永遠の平和を計れる、實に時代を超越せる觀あり。衣囊にホーマーを置き、劍を以て世界を切り従へんとの抱負を遂行せんとし、胸中の悶々たる時

には涌くが如き智略とアルプを抜く勇氣とに快感を覺えたるべく、遠洋の飛鳥に流さるゝや、居常鬱々たりとはいへ、自ら古來の英雄に比較して満足を感じざるものゝ如し。彼は不可能を追求して智囊を絞りし爲に、何の邊まで人智を働かし得るかを示し、英雄の古代に限らず、後世に古英雄を凌ぐものあるを證明せり。

五 人生の快事その三

青年の功名に急なるものは、政治家たらんことを希望するもの多し。何れの國にも法政の學を修むるものゝ多きは、官吏となり、銀行會社員となる外、比較的功名心を満すべき

門戸の開かれ居るが故なり。山高ければ麓廣し。高き位置あるが故に麓に集る者甚だ多し。されど高き位置に上れる政治家に何の快樂あるかといへば、世俗の所謂快樂を得ることは少し。後世に欽慕せらるゝ者は特に然り。奈破崙に對抗して英國の權威を維持せしウイリアム・ピットは獨身にして、國家を以て妻とすと稱し、收入を擧げて政治の事に投じ、爲に負債山の如くなりき。伊國の建設に當り、獨り國政の整理に任せしカウールは、同じく國家を以て妻とすと稱せり。大いに富み大いに驕らずんば、高き位置を占むる効なしといふ者あれど、かゝる事に歡樂を求むる徒は、政界に飛ぶとも僅かに蝙蝠の飛ぶが如し。大政治家の

William Pitt

Cavour

Marcus Aurelius

Pallissy

愉快は、我が施設の効顯れ、幾分にてても國家社會の進善せんとするを見るに在り。古代には諸葛孔明の如き、マルクス、アウレリウスの如き傑出せるものありき。器械の應用は近世に入りて加速度の進歩を遂げ、商業・工業・農業は之が爲に重きを加へ、嘗て立功家として軍人及び政治家を推したるもの、今は之に商業家・工業家・農業家等を加へざるべからざるに至れり。貧困は發明に必要ならず、富みて新工夫を運らし、あり、貧困を忍びて成し遂げし事業の價值の少きもあれど、新發明・新工夫の記録は半面より觀て貧困との闘争なり。パリスシの如きは一の極端なる例とすべし。實際に於て、勇者は世に益すること多きにもせ

よ、後人を感じ奮し、努力せしむるは、一切を放擲して事に専らなるもの、傳記にして、事業としての直接利益の外、間接に人心に益する所多し。「彼も人、我も人、豈彼の如くなるを得ざらんや」と後人の發憤するは、富貴にして歡樂に耽る所に在らず、己の爲すべきを信じ、斃れて後已まんとする所に在り。爲に人は往々立德の事に考へ及ぶ。

帝王は一世の尊、而も孔子の廟に跪き、釋迦の寺に跪き、耶蘇の寺に跪けり。個人の勢力にして最も廣く最も久しく影響の及ぶべきものを擧ぐれば、斯く帝王を跪かしむる立德家なりとすべく、隨つて志の大なる者の、以て人生の最大快事とするは之に彷彿たるに在り。されど、彼等がたとひ能

く立德家の如くなるを得たりとて、果して愉快なるを得べきか。功名心の熾なるものは、後世に於ける勢力の孔子・釋迦・耶蘇の如くなるを欲しつゝ、現在に於て孔子・釋迦・耶蘇の如き不遇、又は不快なる生活を送るを欲せざるべし。もと立德は人生の美點を綜合して考へたるもの、人生の完成を以て衆徳を具ふるにありとし、暫く史的人物を藉りて之に充つるのみ。人生最上の目的は立德なりと雖も、立德家たらんには、如何にせば可なるかといへば、容易に解答を與へ難し。分け登る麓の路は多けれど、同じ高嶺の月を見る。立德は高嶺の月なり。而して麓の路の最も主要なるものは、實に立言及び立功に在り。立言に種類あり、詩あり、文あ

り、藝術あり、科學あり。立功に種類あり、軍事あり、政治あり、商業あり、工業あり、農業あり。之を細分すれば頗る多數に上るべけれど、其の孰れかを念とし、十分にその能力を伸ばせば、幾許か立德たるを得ん。

高山の絶頂は寒冷にして風強く、久しく居るに堪へず。而も健脚なる者は、麓にありて百花の咲き亂るゝを觀て満足せず、必ず蒼空を凌がんことを期す。歡樂は麓にあり、安樂は麓にあり、日常の愉快は悉く麓にあり。されど他人より身體の强健にして女兒の樂しむ所の外に出でざるは、聊か物足らず覺ゆべく、時に餓を忍び、寒に堪へ、絶頂に至りて千里一望の快を恣にせんとす。或はアルプを低しとし、全く

人跡絶えたるヒマラヤ山に登らんと企つ。而して若し幸にその上に立たんか、千古の氷雪萬里に亙るを見て、壯絶快絶壯絶々を叫ばん。女兒も之を聞いて地球の最高處に立つの如何に愉快なるかを想像し、唯己の企て及ばざるを歎ぜん。蓋し形而下の快事は多數の求むる所にして、形而上の快事は少數の求むる所なり。而も求むると求めざるとの差こそあれ、形而上の快事を以て人生の最大快事なりと認むるは、世間一般に通じて動かすべからざる所の事實なり。
(日本及日本人)

六 萬葉集の歌

柿本人丸
人丸は普通に
人麿と稱す。

吉野宮に幸ませる時

柿本人丸*

安見し、吾が大君

神ながら神さびせすと

妹當今曾吾行目耳谷吾耳見事

吉野川瀧つ河

不同侶

内に

わらわしりまきわのくめしりし
わらわしりまきわのくめしりし

高殿を高知り

足代過而絲塵乃山之榜花不教在南

座して

還末万代

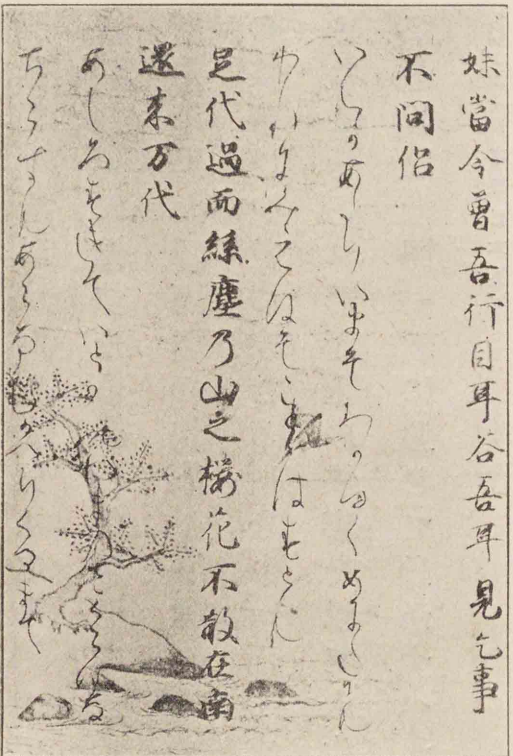
上り立ち國見

あしりまきわのくめしりし
あしりまきわのくめしりし

をすれば

あしりまきわのくめしりし
あしりまきわのくめしりし

たゝなはる青



萬葉集古寫本

垣山の

山神ヤマノカミの奉る御調と

春べは花かざし持ち

秋立てば紅葉かざせり

ゆふ川の神も

大御食に仕へまつると

上つ瀬に鶉川を立て

下つ瀬に小網コアガさし渡す

山川も依りて仕ふる

神の御代かも

反歌

山川もよりて仕ふる神ながら

たぎつ河内に船出せすかも

不盡山を望みて

山部 赤人

天地の分れし時ゆ

神さびて高く貴き

駿河なる富士の高嶺を

天の原ふりさけ見れば

渡る日の影も隠るひ

照る月の光も見えず

白雲もい行きはゞかり
語り継ぎ言継ぎ行かむ

時じくぞ雪は降りける
富士の高嶺は

反歌

田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ

富士の高嶺に雪は降りける

子等を忍ぶ歌

山上憶良

瓜食めば子ども思ほゆ

栗食めばましてしのばゆ

いづくより來りしものぞ

眼交マナカヒにもとなかゝりて

安寝しなさぬ

反歌

白金も黄金も玉も何せむに

まされる寶子にしかめやも

勇士の名を振ふを慕ふ歌

大伴家持

ちゝのみの父の命

はゝそばの母の命

おほろかに心つくして

思ふらむ其の子なれやも

丈夫や空しくあるべき

梓弓末ふり起し

投矢もち千尋射わたし

劍太刀腰に取り佩き

足引の八峰踏み越え

差任サシヤブる情ナホロさやらず

後の代の語り継ぐべく

名を立つべしも

反歌

丈夫は名をし立つべし後の世に

聞き継ぐ人も語り継ぐがね

杉の梢云々
秋の空、尾上
の杉を離れけ
り。(榎本其
角)

七 秋思の瞑想

綱 島 梁 川

杉の梢を高く離る、秋の空、何ぞ超脱の氣象饒かなる。一念の塵を留めざる秋の潭、何ぞ淵黙にして智慧を藏するの深き。星を洞觀の眼と開き、雲を葛巾の帽と戴き、紅蓼・白蘋の裳裾輕げに、あるは樹間の聲を弄し、あるは獨り瀨氣流るる空明の野を行く。まことに秋の姿ぞ哲人・道士の高姿なりける。見よ、其の衣を。尾花が波、錦の森、桔梗・刈萱・女郎花、さては芙蓉・紫苑・藤袴の様々に染めいづる彩のかずく、目はあやなれど、あはれ春草の萋々、夏木の鬱蒼と比して、何ぞ其の楚々として、譬ふれば一衣の羅縠の風にも婆娑たる道

士の羽衣に似たるぞや。 聽け、其の聲を。 滿野雨ふるが如き蟲しぐれの幽思、遠情は、人の心耳を澄ましめて、微妙の法音を聽くが如く、鏗々・錚々として金鐵皆鳴る。 風聲・樹聲・天籟・地籟は、直ちにこれ哲人の豫言、禪士の喝語として、我等が念々の觀省に資するものならずや。 秋を仰ぎて先づ想ふは哲人の姿なり。

哲人の世界は觀念の世界なり。 積水の碧を湛へたる氣海、月光の清輝に漂へる露華、白葦・黃茅の丘野、蘆花・淺水の江湖、いづれか秋は空明一氣の中を流れざる。 山の阿、水の涯、到る處寸翳の目を遮るものなく、^{*}によつぽりと浮び出でたる山、美しうくねりゆく川、すべてこれ晶明、すべてこれ澄徹。

によつぽりと云々と云々
によつぽりと秋の空なる富士の山。(上島鬼貫)

げに萬有は秋に至りて一箇の觀念世界を披展せるなり。
 あらゆる形式、あらゆる徽號の衣を脱ぎすて、直ちに觀念
 其のまゝを赤裸々に露呈し來る。
 あらゆる形式、徽號の薰染を離れたる觀念、如實の秋の姿は、
 一面また實在の躍々人に迫る姿なり。秋は實に其の觀念
 化せる明瑩の姿を以て人を壓し來る。臚にうつる春の月、
 打霞みゆく春の水の假象の世界はこゝに無くして、蔦・紅葉
 の中より露るゝふしくれだちし樹身、枯芝生より躍り出づ
 る偃蹇たる雲根、いづれか秋は人に迫る實在の力を示さざ
 る。

吾等が哲人、秋の太虚のこゝろを仰ぎ見よ。いづこにか一

點妄念の翳カゲを著けたる。もし斯かる翳のありとせば、それは
 遙かなる地平線上に、罪業の名残かすかなる斷雲の一片二
 片のみ。而してそれだにやがて孤行しつゝ、低迷しつゝ消
 え行くなり。哲人の清襟時に罪業の雲の徂徠せざるにあ
 らねど、それは倏ちにして、一碧の心に没し去つて、また何等の
 累をもとどめざるなり。萬象を碧落のこゝろに包みて、執
 せず、惑はざる剛明一氣の姿は、われ唯秋の太虚に之を仰ぐ
 なり。嗚呼、高い哉、秋の品性。

煙の如き豊草の春に引きかへて、秋野としいへば、人目も枯
 れゝなるうらぶれ姿まづ目に浮べど、あはれ枯井、斷礎を
 千草の秋と咲亂れたる野邊の暖さ、美しさは、また一しほの

人目も枯れ
 云々
 山里は冬ぞ寂
 しきまざりけ
 る人目も草も
 枯れぬと思へ
 ば(古今集源
 宗千朝臣)

風情ならずや。春の若草の媚態はなけれど、秋の野の温情は、譬へばさた過ぎたる婦の操高く、心すずしく、歸依・慈愛の性深きにも似たるかな。想へば我、尾花が秋の懷に抱かれて、得ならぬ氣海のにほひを身にしめつゝ、孤懷そぞろに遠くに聘せて、去にしをりく、一種いひ知らぬ懷かしさに心動きて、涙下りしこと幾たびなりしぞ。而して我は記す、そは極めて樂しき涙なりし事を。げに天地の温情は、秋の野にこそ高く脈うつとは知らるれ。(梁川文集)

八 近世の儒學

徳川家康が文教奨励の氣運に乗じ、朱子學を標榜して其の

藤原惺窩
元和五年(三三九)歿す。

林羅山
明曆三年(三三七)歿す。

叔孫通
漢の博士、高祖に説きて朝儀を起さしむ。

松永昌三
明曆元年(三三三)歿す。

木下順庵
元禄十一年(三三三)歿す。

新井白石
享保十年(三六六)歿す。



先驅となりし者は藤原惺窩なり。惺窩は其の功績より言へば儒學中興の名譽を値し、又實に戰國・霸府兩時代の聯絡を通ぜし者なり。其の門下第一の林羅山は、強記博識にして

て霸府の叔孫通と稱せられ、
長く林家の學統を傳へしと
原雖も、未だ多く關左の文運を
惺窩振興する能はずして止みぬ。
松永昌三亦惺窩の學を傳へ、
其の弟子木下順庵に至りて

門戸頗る大に、後、東に下るに及び、此の地の儒學爲に盛なるを得たり。之に従遊せしもの新井白石・室鳩巢・雨森芳洲・祇

室鳩巢 享保十九年(三
元四)歿す。
雨森芳洲 寶曆五年(三
五)歿す。
祇園南海 寶曆元年(三
四)歿す。

山崎闇齋 天和二年(三
三)歿す。

淺見綱齋 正徳元年(三
七)歿す。
三宅尙齋



林 面的に開展し、其の貢獻せし
所實に多しとす。山崎闇齋
は、南學を傳へ、後、一變して垂
山 加神道を唱へ、大いに國民的
氣槩を養ふに努めしが、その

末流れて水戸學となり、王政復古の一原動力となれり。闇
齋の門下に淺見綱齋・三宅尙齋・佐藤直方等あり、之を崎門の
三傑といふ。又水戸學を樹立せしむるに與つて力ありし

元文六年(四
〇)歿す。
佐藤直方 享保四年(三
九)歿す。
立原翠軒 文政六年(四
六)歿す。
藤田幽谷 文政九年(四
八)歿す。
青山拙齋 天保十四年(二
五)歿す。
藤田東湖 安政二年(五
三)歿す。

寛政の三博
士 柴野栗山・尾
藤二洲・古賀
精里。

ものを立原翠軒とす。藤田幽谷・青山拙齋の如き皆その門
下に出づ。東湖は即ち幽谷の子なり。
元明以後の支那に於けると同じく、霸府が正學として表章
せしものは朱學にして、上は昌平黌より下は諸侯の藩學、民
間の私塾に至るまで、到る處之を教習せしかば、學者の多き
殆ど指を屈すべからず。されど朱學は其の體系既に完全
に近く、他の思想と交渉せざる限りは革造の餘地を存する
こと少かりしを以て、學說の進歩特に言ふべきものなく、其
の活動的なりしは、主として當初に限られたり。後寛政の
三博士大いに學政を革め、再び斯學を標章せしと雖も、其の
本質に於ては毫も變化を及さず、其の態度其の勢力俱に依

陸王學
陸象山と王陽明との學說。

中江藤樹
慶安元年(三三〇)歿す。

熊澤蕃山
元祿四年(三三三)歿す。
大鹽中齋
天保八年(三四九)歿す。

然として舊に仍れりき。しかも朱學が、諸種學派の先驅として學界に盡し、功は之を没すべからざるなり。朱學と反對の地位に立てる陸王學の五山に於けるや、亦久しからずとせず。而して惺窩も亦公平の見を以て、敢て象山を棄てざりき。こゝに陽明歿後八十年、我が慶長十三年近江聖人の稱ある中江藤樹は生れたり。藤樹初め程朱の書を読みしが、漸く疑ふ所あり、後陽明の書を得、之を研鑽して深く崇信し、始めて其の學を江西に唱へぬ。尋いでまた熊澤蕃山・大鹽中齋等あり。清朝に於て殆ど其の跡を留めざりし姚江の學は、本邦に入りて其の流長く絶えず、省察事功の兩者に於て、往々奇偉の士を出したるを見る。

山鹿素行
貞享二年(三四五)歿す。
伊藤仁齋
寶永二年(三三六)歿す。
荻生徂徠
享保二年(三三六)歿す。



伊藤仁齋

清朝考證學の勃興と同時に、我が邦に於ても古學派の起るあり。其の徒は宋明の性理殊に程朱を排斥し、漢唐の註疏に據りて、純粹なる原始的意義を闡明せんと企てし者なり。山鹿素行・伊藤仁齋・物徂徠の如き即ち是なり。而して此等諸人才力の非凡なる、講習仁より一步を進めて、よく斬新奇警の説を出せり。素行はゆくりなくも其の學を以て奇禍を買ひしが、儒教の粹たる道義的精神を以て我が國體に調和し、武士的教訓を後代に残せり。古學を立せる仁齋

と古文辭學を唱へたる徂徠とは、鮮明なる旗幟を以て東西に對峙し、其の學界に及せる影響甚だ大なり。仁齋は理氣



に就いて辨じ、全く哲學者のなれども、徂徠は苟卿韓非を參酌して國家の治を論じ、正生しく政論家なり。仁齋の子徂には東涯あり、徂徠の門には徂太宰春臺あり。若し夫れ眞

正の考證に至りては、安永・天明の間吉田篁墩あり、しかも必然の勢、次に述ぶる折衷學と緊密の關係あるを以て、その徒中の人往々にして、之を兼ねたり。

東涯

元文元年(三三九)歿す。

太宰春臺

延享四年(四〇七)歿す。

吉田篁墩

寛政十年(三四五)歿す。

榊原篁洲

寶永三年(三三六)歿す。

片山兼山

天明二年(三四四)歿す。

井上金蛾

天明四年(三四六)歿す。

石田梅巖

延享元年(四〇〇)歿す。

手島塔庵

天明六年(三四六)歿す。

折衷學は木門の榊原篁洲が新古兩註を並用せしに始り、物伊二家の末流、各黨を樹てし時に於て確立し、公平の態度を標して諸家の所長を折衷し、寶曆・天明の間最も其の盛を極めぬ。片山兼山、井上金蛾の如き即ち此に屬す。

以上四派の儒學の外、儒教に加ふるに我が國特有の神道及び佛道二教を以てし、或は其の二、或は其の三、或は其の四を兼ねて調和を圖れるあり。又、平民教派ともいふべき心學あり。もと陽明學の餘派と稱すれども、巧に神・儒・佛の教を取り交へ、通俗易解を主として市井の間に講説し、能く顯著なる効果を收めたり。石田梅巖、手島塔庵、中澤道二、柴田鳩翁の如きは、即ち心學者の主なる者なり。又、二宮尊徳の唱

中澤道二

享和三年(三三)歿す。

柴田鳩翁

天保十年(三三)歿す。

二宮尊徳

安政三年(三五)歿す。

墨子

墨翟

管子

管仲

へたる報徳教あり、其の説、經濟道德の關係を要とし、其の天の法則を認識せるは墨子に近く、其の利を重んずるは管子*に類す。彼や固より不世出の才、期せずして自ら此に至れるなり。(日本儒學史に據る)

九 王陽明の大悟

高瀬 武次郎

抑、龍場の地は貴州省の西北に在りて、朝廷より派遣せる宣慰使の管轄する所なり。萬山叢棘の中、蛇虺群を成し、魍魎晝現れ、瘴癘・蟲毒の艱苦言ふべからず。夷人の言語又皆蹇舌にして辨じ難し。言語通ずる者は皆中土亡命の徒なり。居るに宮室なく、唯土を累ねて窟と爲し、其の中に寢息する

のみ。是に於て先生土俗に教ふるに、木を範して塹と爲し、木を架して梁と爲し、草を刈りて蓋と爲し、屋宇を建立するを以てす。人皆之に倣ひ、始めて一方に棲息の所あり。夷人又先生居る所、湫隘樸陋なるを以て別に之が爲に木を伐り室を備へ、其の制を宏大にし、幾ばくもなくして寅賓堂、何陋軒、君子亭、玩易窩を成す、之を總稱して龍岡書院と曰ふ。之を圍繞するに檜竹を以てし、之に蒔うるに卉藥を以てす。先生日夕其の中に吟諷し、漸く夷語に習熟す。乃ち之に教ふるに禮義・孝悌を以てす、他處の夷人の特に來りて其の講を聴くもの多し。先生専心開導して略、倦怠の色なし。久しうして先生家郷の音信を得たり、書中に言ふ、逆臣劉瑾先

生の死せざるを聞き、且先生の父子南都に相會せしを偵知して、益大に悲忌し、朝旨を矯め、父龍山公を諱し、退職して郷

客座私祝
 但願温恭直諒之友來
 此講學論道示以孝友
 謙和之行德業相勸過

山川 魏 勇 先生 贈 文 存 仁 由 萬 壽 寺 高 風 山 師 劉 明 題

王陽明筆蹟

に歸らしむと、先生孝親の念愈盛なるに至れり。先生曰く、「劉瑾の忿怒なほ未だ解けざるなり。吾得失榮辱は皆度外に付すべきも、唯生死の一念、自ら省みるに未だ超脱するこ

と能はず」と。乃ち居室の後に於て石を鑿ちて槲を爲り、夜夜其の中に端坐して、心界の靜一を求む。胸中灑然として、將に身を終へんとするが若く、夷狄患難俱に之を忘る。但、門人從僕其の憂に堪へず、屢病を患ふ。先生自ら薪を采り水を汲み、粥を作りて之を飼ひ、又其の抑鬱を懷かんことを恐るれば、輒ち之を和解放散す。又或は詩を歌ひ、或は越州の俗曲を製し、相與に諧笑し以て其の意に適せしむ。因つて又思ふ、若し聖人をして此の艱難に遭遇せしめば、之に處して必ず吾が此の方法よりも一層進める者あるべきか。吾今恐らくは格物致知の工夫に於て未だ到らざる所あるなり」と。

一夕夢寐恍惚の間忽然格物致知の奥旨を悟る。恰も人の之に語る者あるが如し。覺えず突然呼躍す。從僕傍睡者俱に驚き覺む。是より胸中灑々始めて豁然大悟の境に入れり。先生嘆じて曰く、聖賢が學に於て美果を結ぶは、只此の良知の二字を取り用ふればなり。所謂格物とは此を格するなり、所謂致知とは此を致すなり。思はずして得とは何を得るか、勉めずして中るとは何に中るか、總べて此の良知を出でざるのみ。唯其の良知たるや、得ることは思に由らず、中ることは勉に由らず、若し徳性の知を捨てて、見聞の知を逐はゞ、縱令想ひ得るも、亦水を支流に取つて、終に未だ江海に達せざるが如し。これ一事一物の知に過ぎずして、

大本根源の知に非ず。之を變化に試みるに、終に窒礙なり。必ず孔子の心の欲する所に従うて矩を踰えざるが如くして、方には良知の全作用を得たるなり。故に入るとして自得せざるなし。是の如くんば又何ぞ窮通榮辱死生の見あつて、以て其の間にまじはるを得んや。是に於て始めて知る、聖人の道は吾が性中に自ら具備す、吾が前日、理を心外の事物に求めしは、大に誤れるを。乃ち默記せる五經の句を以て、自ら其の旨を證するに、脗合せざるなし。因つて五經臆説を著す。蓋し先生が主唱する所の心即理の説は、即ち聖人の道は吾が性にて自ら足れり、嚮の理を事物に求めしは大いに誤れりと云へる一語にて已に盡せり。なほ詳

言すれば自己の心性を全うして之を根據標準と爲し、外界の事物に理を求むべからずと云ふに在り。故に先生は格物は視聽言動思の五事を正しうするに在りと解し、致知は人間固有の良知を致すと解せり。格物致知の解釋は朱子と大に異なる所にして、先生特得の見と爲す。先生の斯の悟道は實に陽明學の曙光と謂ひつべく、是より日一日進捗して、遂に斯學を大成するに至れり。(王陽明詳傳)

一〇 月は世々の形見 室 鳩 巢

今年もはや半ば過ぎぬれば、いつしか秋の氣色たちて、萩吹く風も身にしむ頃なり。「久しく翁のがり行かねば、此のほ

どの老のねざめも覺束なし。いざ尋ね問はむ」とて、或夕暮に例の人々打連れて來りしが、「又も參らむ」とて歸らむとせしを、翁止めて「今宵は月もよし。薄酒進め奉らむ。しひて止り給へ」といへば、翁の心を争で背くべき。さあらば」とて各座をしめて、清談の露やうく繁き程に、家人聽て心得て取敢へぬ迄にあるじまうけし、肴取添へて盃出しけり。諸客皆酔うて興に入るとぞ見えし。其の中に一人盃を停めて「青天有月來幾時、我今停盃一問之」と、李白が詩を高らかに打吟じけるを、又二人脇よりつけて「人攀明月不可得、月行却與人相隨」と歌ふ。又外の人々迭に唱和して、其の次を「皎如飛鏡臨丹闕、綠煙滅盡清輝發」と歌ふ。又其の次を「但見宵從

海上來、寧知曉向雲間沒、白兔搗藥秋復春、姮娥孤棲與誰鄰。と歌ふ。其の次よりは翁も助言して、今人不見古時月、今月曾經照古人、古人今人如流水、共看明月皆如此、惟願當歌對酒時、月光長照金樽裏。とうたひをさめけり。其の後數獻に及びて、玉山倒るゝばかりに見えけり。

さて翁いふやう、『大^{*}かたは月をもめでじ』とはよみたれども、老の心も月みるにこそ慰み侍る。されど其につきて百載無窮の感も起りぬれば、むべ月を『人の老となる』ともいふべかめり。但し月を見るに色々あり。今思ひ出し侍る。童子の時、家にて八月十五日の宴に、獨り隅に向ひて居たりしに、さる武士の一丁字知らぬが、月をつくと、と見て、『月は徑

大方は云々
大方は月をも
めでじ是ぞ此
のつもれば人
の老となるも
の。(古今和歌
集葉平朝臣)

幾尺かあるべき、各考へて見給へ。』といふ。又同じやうの人かたへより、『彼は物の切口とみゆ。奥へ長さいかほどかあらむ。』とて、たがひに僉議しけるを、きく人々皆舌を喰ひけり。翁も幼心にをかしかりし。今おもへば世俗月を賞して、光の明きを誇り、影の清きにめで、良夜とて唯打寄り、物喰ひ酒飲みなどして歌ひ罵るを樂とするは、かの寸尺を語るに等しかりぬべし。又騷人墨客の月を詠めて、字毎に金玉を雕り、句毎に錦繡を裁するも、風雅には聞ゆれど、其も唯景氣の上を翫ぶばかりにて、月に深き感ある事を知らぬなるべし。

翁が千載無窮の感と申すは、我が儕古人を慕ひて、其の書を

よみ、其の心を知りつゝ、常に世を隔てたる恨あるに、月許りこそ世々の人を照し來て今にあれば、古人の形見ともいふべし。されば月に對して昔を忍びては、宛ら古人の面影も映る様に覺え、月は物言はねども語るやうにも覺え、忘れては昔の事を問はまほしくも思ふぞかし。今李白が詩、月の景氣をすてゝ、一氣に古今を洞觀して、『青天有月來幾時。』といひ出づるより、氣象の高さ拔群に聞えて、詩の豪蕩超逸なるも、外の詩人の及ぶべき事がらにあらず。昔より李杜として杜甫が上に稱するも理にてこそ侍れ。しかれども李白の詩も『古今如流水』を感ずる迄にて、後代を待つ心の見えず。翁昔楚辭をよみて『往者余弗及、來者吾不聞。』といふに至りて、

楚辭
支那の楚の
原の著したる
もの。

屈子が心をおしはかりつゝ、感にたへずなむ覺えき。此の二句の意をいふに、屈子一代に知己なきを悲しみて、古人は誠にわが心を得たれば、あはれ一度あうて語らむと思へど、其の世に及ばねばかなはず。又末の世にさる人こそありて、我と心と同じうすらめと思へど、其の人をきかねば、誰とかしらむとぞ。是なむ屈子に限らず、古今心ある際は、大方此の恨なきにしもあらず。翁も此の心にして月を見るにや、いと感深く覺ゆるなり。元より今は末の世の昔なれば、いづれの世にか、又我が如く月に對して、今を忍ぶ人もやあらむ。月はさこそ其の世をも照すらめ。若しあつらへ告げらるゝものならば、月にさは一言をものこさましとお

もひ侍るそのこゝろを、

月みれば末の代までも忍ばれて

見ぬいにしへのいとゞゆかしき

こゝをもて翁が月に無窮の感ありといへるを、諸君考へ見給へ。いはれなきにはあらず。(駿臺雜話)

一一 月花のことわり 村田春海

わかさくらの宮
履仲天皇の御代
朝倉の宮
雄略天皇の御代

花をめぐらしみ月をあはれむならはしなむ、流れての世はさらなる、其のみなもとを考ふるに、いとしも上つ代よりぞ起りにける。花に心を慰めませしは、わかさくらの宮にはじまり、月を言の葉にかけ給へるは、朝倉の宮よりなむ聞え

藤原
持統・文武二帝の御代
奈良の御代
元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・稱徳・光仁七代の御代

たる。しかありて後、藤原奈良の御世にいたりては歌人おほくいで来て、かたみにみやびをかはし、こゝろに思ひをのぶる事、皆月花をもて心の種とぞなしたりける。かくて世のうつるにしたがひて、此のすさみいよく盛になりもてゆきて、あるは物おもひなき春を花によるこび、加る老を月になげき、あるは賢きも、おろかなるも、たよりなき所にはなをたづね、しるべなきやみに月をたどり、あるは花のいのちを神にいのり、月のゆくへを佛にちぎり、又しものしもなる薪木こる山がつ、いぶせきふせやのしづのめまでも月と花とに心をよせざるなむあらざりけらし。さるはかけまくもかしこき大御遊のきはことなるが中にも、月と花と

の爲には時にのぞみて殊更にうたげの筵を設け給ふ事おきてたがはず。のどかなる御世のためしにさへなり來にけり。かくさまゞなる代々のあとを見るに、いにしへも今も高きもみじかきも、月と花とをうむかしみおもへること等しくて、いづれをあまれりとし、いづれをたらずとして一かたに心よせたる人誰かはあらむ。しかるを今にありて其のよしあしをことわりいはむは、人わらひにもなりぬべし。しかはあれどこれをことわるにゆゑあり。その劣り優りはもとよりかれにはあらざめれど、おのがじゝ打見る人の身にたぐへおもはむには、其のよるかたいかでかなからむ。抑、花は春にありて賑しきにより、月は秋にありて

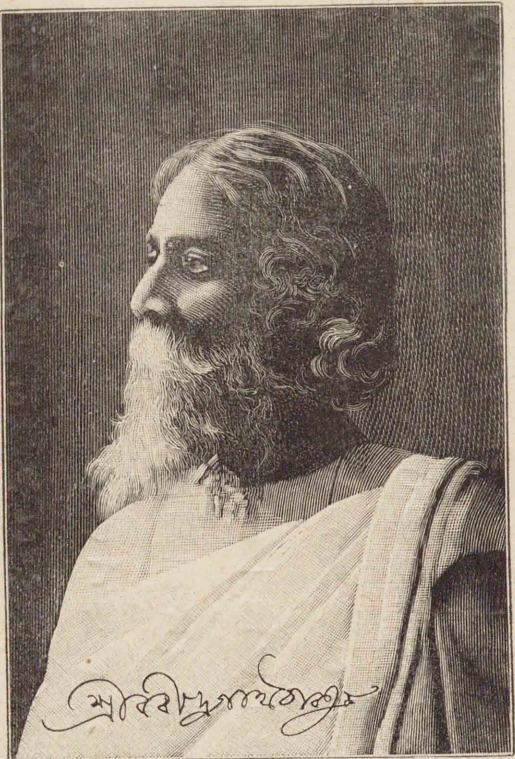
悲しみをぞ起すなる。今このくちおきなが心にとりていはば、身すでに老いたれば、つぼめる花のさかりまちいでむたのしみもなく、品いやしければ、花々しき世をへて時にかをらむ願もかけず。ただ鏡にうちむかふをりしも、頭の霜を見ては月の影かと驚き、かたぶく齡をおもひては、入りかたの月ぞ身によそへつべき。かゝれば花にはおのづからにうとく、月にぞ心のひかれける。さはいへ、こはわが身ひとつのすさみなり。おほよそ人の爲にはいかでかまねびもいでむ。(琴後集)

一二 靈は亡びず

タ
ゴ
ー
ル

亞細亞全體が眠つて居た間に、日本は夢を破つて進歩の勇者となつた。古代に於ても亞細亞には有力の國があり文明もあつた。歐洲が暗黒に眠つて居た間に、亞細亞は文明の炬火を擧げて居た事を思へば、亞細亞が天性退歩の大陸であるとは考へられない。一朝日本が目醒めて、其の舊慣を破つて進んだのを見て、世界は驚いた。成熟の強さと共に新鮮の生氣を示して、日本は蹶起したが、其の新生命がしやぼん玉でなからうかといふ恐を抱くものも少くなかつた。併し日本は其の力が短命な一時の現象でないことを確かにした。自分は今迄に十分日本を研究して居ないが、日本が如何に其の問題を處理するかといふことは、獨り吾

吾東洋人が大切と思ふのみならず、全世界は熱心に之を見張つて居る。日本が唯西洋を模倣するなら、夫は皆に取つ



て大失望である。西洋文明は自分の問題を解き得ないで居る。個人と國家、労働と資本、男性と女性、此等の關係や又

利得の貪慾と精神的な生活との衝突、各國民の私利主張と人類の高尙な理想との衝突、此等を如何に處置すべきか此處

に大問題がある。西洋文明を輕卒に其のまゝに受入れ
るのは實に危い。日本は其の東洋魂を應用して、世界に處せ
ねばならぬ。心血に滲みこみ骨髓に喰入つた魂、之を現代
に應用して新しい創造をして欲しい。日本が之を成し遂
げるなら、歐洲が提出した問題を亞細亞が答へることにな
り、其の結果近代文明の趣を一變し、一片の成功利徳以上、更
に眞と美との生命を世界に與へることにならう。

印度は一國でなく、いくつもの國が一所に集つたものであ
つて、締りのない爲に苦しみ、又一所になつて居る爲に苦し
んで居る。但し此のやうな變態は印度自らが造つたので
ない、其の國土へ來る者を段々に迎へ入れた結果である。

印度の歴史に征服といふことは極めて稀であつた。人民
は雜多であるが、夫を社會的に纏めようとして、其の結果印
度といふ大きな組織になつた。印度教は雜多の人民に各
自由を與へて、而も觀念で之を纏めた。世界の人種問題も
此處に解釋の模範を有して居ると思ふ。此の一致は實に
人類は精神的に一つだといふ信念に基づいて居る。

然るに歐洲の文明は相互排斥を主義とし、他を排斥するか
又は併呑するかである。自分自身の外に偉大な人種があ
れば危険呼ばはりをし、自分以外の者は何時迄も弱くて蟄
伏するやうにする。そこで此の文明は世界を呑んで仕舞
はうとして、互に唾み合つて競争の一事に全力を盡す。此

のやうな状態が此の儘で進むことは出来ない。宇宙の道徳法を無視し、國民の名で道徳を破り、それで個人が幸福に生活し得る譯がない。

古來力の國は興つては亡びたが、靈の力は亡びない。吾々は長い間生きて來た、今も生きつゝある。而して限りない實在を追うて、平和と清淨とを求め、又喜んで己をも棄てる。これ疲れた者にとつての休み、失望した者の安慰、且又眞理を追ふ心が雜多の事實や矛盾に面して求むる所。内面生活の價値は材料を殖すにあらずして精神の充實にある。戰ふには神經を勞する。併し理想は靜かに成長し、種子から花を開き、花から果を結ぶ。理想の成長は無限の光を求

め、果實は踏み蹂られても生き残る。東洋には其の理想があつて、長い時間の光を貯へ、聲なき星を宿して、西洋が走り走つて氣息を切るのを眺める。東洋は自らの生命が不滅であることを覺知して居る。何度でも蘇生して現れる。歐洲は自動車に乗つて、野邊に耕して居る者を見下し、自分だけが進んで居ると思つて居る。併し運轉は何時かは止まる。而して車上の饑ゑた人は終に野に耕す者に來て其の獲物を求める。東洋は此の時の來るのを靜かに待つて居る。

勿論自分は歐洲の長を認めるに躊躇しない。其の文學や美術で美と眞との無限の瀑布を流す歐洲、疲を知らない力

を集中して、宇宙の大から極微をも究め、知力のあらゆる富源を傾けて病を醫し、慘害を減ずることに勉めつゝある歐洲は、人道に面して立つ時には恐ろしく善に強いが、自利の爲に計る時には恐ろしく悪にも強い。東洋の進路は政治的でなく、社會的であり、機械的でなく精神的である。東洋は隱遁靜生の中に生命の問題を解かうとした。然るに今や外からの刺戟で、此の靜穩は永へに破れた。我々が皮殻を破つた時、即ち樹木の生命が世の光を求めて生長すべき時である。皮殻を脱けて出て世界に面して立つには、日本が東洋の先驅になつた。日本は亞細亞全體に希望を吹き込んだ。希望は何れの創造にも必須の光明である。東洋

は眠つて居てはならぬ。又西洋の模範で満足してはならぬ。東洋は活きた事業をして、自分の生命を説明すべきである。此の事に就いて、或は日の出の國に感謝を來し、其の國民が東洋として成就すべき使命あるを記憶して貰ひたい。日本は近世文明に對して、一層高く深い人道の生氣を吹き入るべきである。日本は其の生命を雜草に蔽はれないうやうにし、光明と自由とに進むやうにし、生命が天の生氣に活されるやうにすべきである。日本は其の國土の眞中から生え出て、無限の天空に聳える白雪の富士の如くに、自分の偉大な理想が衆人の眼に映ざるやうにしなければならぬ。萬山の上に立ち、美はしいことは處女の如く、而も固

く強く靜かに雄大な富士之が日本の理想であらう。

一三 安宅その一

ワキ「かやうに候者は、加賀の國富樫の何某にて候。さても頼朝・義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿十二人の作山伏となつて、奥へ御下向の由頼朝聞しめし及ばれ、國々に新關をたて、山伏を固く選み申せとの御事にて候。さる間此處をば某承つて山伏を留め申候。今日も固く申しつけばやと存候。いかに誰かある。狂言「御前に候。ワキ「今日も山伏の御通りあらば此方へ申候へ。狂言「畏つて候。シテ「山伏旅のころもは篠懸の、旅の衣は篠懸のつゆけき袖やしをるら

これやこの云々

これや此の行くもかへるもわかれては、知るも知らぬも逢坂の關(後撰集、蟬丸)。山隠す云々。山隠す春の霞ぞ恨めしき、いづれ都の境なるらむ。(古今集、おと)。海津の浦。近江國高島郡に在り。浅茅色づく云々。矢田の野に浅茅色つく有乳山、みねの淡雪さむくぞあるらし。(新古今集、人丸)

む。サシ「鴻門楯破れ都の外の旅衣、日もはるく、の越路の末、思ひやるこそ遙かなれ。シテ「扱御供の人々には、同山「伊勢の三郎・駿河の二郎、片岡・増尾・常陸房。シテ「辨慶は先達の姿となりて。同山「主従以上十二人。未だ習はぬ旅姿、袖の篠懸露霜を、けふ分けそめて何時迄の、限りもいさや、白雪の、越路の春に急ぐなり。上歌「時しも頃は二月の時しも頃は二月の、二月の十日の夜、月の都を立出でて、これやこの、行くも歸るも別れては、知るも知らぬも、逢坂の、山隠す、霞ぞ春は、怨めしき霞ぞ春は、怨めしき。下歌「浪路遙かに行く舟の、浪路遙かに行く舟の、海津の浦に著きにけり。東雲早く明け行けば、浅茅色づく有乳山。上歌「笥飯の海、宮居久しき神垣や、松の木目山、猶

筒飯の海 越前敦賀港のあたりの海。
 木目山 敦賀郡と南條郡との境。
 板取 近江と越前との境。
 朝津 越前足羽郡にあり。
 三國の湊 越前坂井郡にあり。
 篠原 加賀の江沼郡にあり。
 安宅 同上。

行く前に見えたるは、柚山人の板取、河瀬の水の朝津や、末は
 *三國の湊なる、蘆の篠原波よせて、靡く嵐の烈しきは、花の安
 宅に著きにけり、花の安宅に著きにけり。 シテ御急ぎ候程に、
 これははや安宅の湊に御著きにて候。暫く此處に御休み
 あらうずるにて候。 判宣いかに辨慶。 シテ御前に候。 判宣唯今
 旅人の申して通りつる事を聞いてあるか。 シテいや何とも
 承らず候。 判宣安宅の湊に新關を立て、山伏をかたく選む
 とこそ申しつれ。 シテ言語道斷の御事にて候ものかな。扱
 は御下向を存じて立てたる關と存じ候。これはゆゆしき
 御大事にて候。まづ此の傍にて暫く御談合あらうずるに
 て候。これは一大事の御事にて候間、皆々心中のとほりを

御意見御申しあらうずるにて候。 出候我等が心中には、何程
 の事の候べき。ただうち破つて、御通りあれかしと存じ候。
シテしばらく。仰の如く、此の關一所打破つて御通りあらう
 ずるは易きことにて候へども、御出て候はむずる行く末が
 御大事にて候。唯何ともして無異の儀が然るべからうず
 ると存候。 判宣ともかくも、辨慶計らひ候へ。 シテ畏つて候。
 某きつと案じ出したる事の候。我等を始めて、皆々につく
 い山伏にて候が、何と申しても御姿かくれ御座なく候間、こ
 のまゝにては如何と存候。恐多き申事にて候へども、御篠
 懸を除けられ、あの強力が負ひたる笈をそと御肩に置かれ、
 御笠を深々と召され、如何にも草臥れたる御體にて、我等よ

り後にひきさがつて御通り候は、なかく人思ひもよ
 り申すまじきと存じ候。判宜げにこれは尤もにて候。さら
 ば篠懸を取り候へ。シテ畏つて候。如何に強力。狂言御前に
 候。シテ笈を持ちて來り候へ。狂言畏つて候。シテ汝が笈を御
 肩に置かるゝことは、なんぼう冥加もなきことにてはなき
 か。まづ汝はさきへ行き、關の様躰を見て、眞に山伏を
 選むか。またさやうにもなきか懇に見て來り候へ。狂言しかじか。
シテさらば御立あらうずるにて候。げにや紅は園生に植ゑ
 ても隠なし。山岡強力にはよも目を懸けじと、御篠懸を脱ぎ
 かへて、麻の衣を御身に纏ひ。シテあの強力が負ひたる笈を。
判宜義經とつて肩に掛け。山岡笈の上には、ツマ雨皮肩箱とり附け

て。判宜綾菅笠にて顔を隠し。山岡金剛杖に縋り。判宜足痛げ
 なる強力にて、よろゝとして歩み給ふ御有様ぞ痛はしき。
シテ我等より後にひき下つて御出であらうずるにて候。さ
 らば皆々御通り候へ。山伏承り候。

一四 安宅その二

狂言如何に申し候。山伏達の大勢御通り候。ワキ何と山伏の
 御通りあると申すか。心得である。のうゝ客僧たちこ
 れは關にて候。シテ承り候。これは、南都東大寺建立の爲に、
 國々へ客僧を遣され候。北陸道をばこの客僧承つて罷り
 通り候。まづ勧めに御入り候へ。ワキ近頃殊勝に候。勸に

はまゐらうずるにて候さりながら、此は山伏に限つて止め申す關にて候。 シテ扱そのいはれは候。 ワキさん候、頼朝、義經、御中不和にならせ給ふにより、判官殿は奥秀衡を頼み給ひ、十二人の作山伏となつて、御下向の由其の聞え候間、國々に新關をたて、山伏を固く選み申せとの御事にて候。さる間此處をば某承つて山伏を止め申候。殊にこれは大勢御座候間、一人も通し申すまじく候。 シテ委細承り候。それは作山伏をこそ止めよと仰せ出され候ひつらめ。よも眞の山伏をとめよとは仰せられ候まじ。 狂言いや昨日も山伏を三人まで斬つたる上は。 シテ扱その斬つたる山伏は判官殿か。 ワキあらむつかしや問答は無益。一人も通し申すまじ



富 樫 と 辨 慶

い上は候。 シテ扱は我等をも、これにて誅せられ候はむずるな。 ワキなかなかのこと。 シテ言語道斷。かかる不祥なる處へ來かかつて候ものかな。此の上は力及ばぬ事。さらば、最期の勤を始めて、尋常に誅せられうずるにて候。皆々近う渡り候へ。 ツレ山伏承り候。 ツテいで、最期の勤を始めむ。それ山伏といつば、役の優婆塞の行儀を受け。

ツレその身は不動明王の尊容をかたどり。シテ兜巾といつば
五智の寶冠なり。同山十二因縁の褶をすゑて戴き。シテ九會
曼陀羅の柿の篠懸。同山胎藏黑色の脚半ハダキをはき。シテ扱又八
目の藁鞋は。同山八葉の蓮華をふまへたり。シテ出で入る息
に阿吽の二字を唱へ。同山即身即佛の山伏を。シテ此處にて
討ちとめ給はむ事。同山明王の照覽計り難う。シテ熊野クノヤ權現
の御罰のあたらむ事。同山立處山伏において。シテ疑ひあるべか
らず。唵阿毘羅吽欠と數珠さらくとおし揉めば。ワキ近
頃殊勝に候。前に承り候ひつるは、南都東大寺の勸進と仰
せ候間、定めて、勸進帳の御座なきことは候まじ。勸進帳を
遊ばされ候へ。これにて聽聞いたさうずるにて候。シテ何

と勸進帳を讀めと候や。ワキ中中の事。シテ心得申して候。
本より勸進帳はあらばこそ、笈の中より往來の卷物一卷取
出し勸進帳と名づけつゝ、高らかにこそ、讀みあげけれ。
夫つらく、惟みれば大恩教主の秋の月は、涅槃の雲に隱
れ、生死長夜の長き夢、驚かすべき人もなし。爰に中頃帝
おはします。御名をば、聖武皇帝と名づけ奉り、最愛の夫
人にわかれ、戀慕やみたかく、涕泣眼に荒く、涙玉を貫く思
ひを、善途に翻して盧舍那佛を建立す。かほどの靈場の、
絶えなむことを悲しみて、俊乘房重源、諸國を勸進す。一
紙半錢の奉財の輩は、この世にては無比の樂ヲクにほこり當
來にては、數千蓮華の上に坐せむ。歸命稽首、敬つて白す

と、天も響けと讀みあげたり。ワキ關の人々肝を消し、恐をなして、通しけり、恐をなして通しけり。ワキ急いで御通り候へ。シテ承り候。狂言いかに申上候。判官殿の御通り候。ワキいかに此なる強力とまれとこそ。山伏すはわが君を怪しむるは、一期の浮沈極りぬと、皆一同に立ち歸る。シテああ暫く、あわてて事を仕損ずな。やあ何とてあの強力は通らぬぞ。ワキ「あれは此方よりとめて候。シテそれは何とて御とめ候ぞ。ワキあの強力がちと人に似たると申す者の候程に、さてとめて候よ。シテ何と人が人に似たるとは、珍しからぬ仰にて候。諸誰に似て候ぞ。ワキ判官殿に似たると申す者の候程に、落居の間留めて候。シテや、言語道斷判官殿に似申したる強力

めは一期の思ひ出な。腹立ちや日高くは、能登の國まで指さうずると思ひつるに、僅かの笈負うて後にさがればこそ人も怪しむれ。惣じて此の程、憎ミソクし憎ミソクしと思ひつるに、いで物見せてくれむとて、金剛杖をおつ取つてさんざんに打擲す通れとこそ。や、笈に目をかけ給ふは、盗人トウジンぞうな。地方々々は、何故に、かたがたは何故に、斯程賤しき強力に、太刀・刀ぬき給ふは、めだれ顔のふるまひは、臆病の至かと、十一人の山伏は、打刀抜きかけて、勇みかゝれる有様は、如何なる天魔・鬼神も、恐れつべうぞ見えたる。ワキ近頃誤りて候。はやはや御通り候へ。

一五 安宅その三

シテさきの關をば早拔群に程隔りて候間、此處に暫く御休あらうずるにて候。皆々近う御參り候へ。いかに申上候。偕も唯今は餘りに難儀に候ひし程に、不思議の働を仕り候事、これと申すに君の御運、盡きさせ給ふにより、今辨慶が杖にもあたらせ給ふと思へば、いよくあさましようこそ候へ。判宣さてはあしくも心得ぬと存ず。いかに辨慶、扱も唯今の機轉更に凡慮よりなす業にあらず。唯天の御加護とこそ思へ。關の者ども我を怪しめ、生涯限りありつる所に、とかくの是非をばもんだはずして、唯眞の下人の如く、さんどに打つて我を扶くる、是辨慶が謀にあらず八幡の御託宣か

と思へば、忝くぞ覺ゆる。地それ世は末世に及ぶといへども、日月は未だ地に墜ち給はず。たとひ如何なる方便なりとも、正しき主君を打つ杖の天罰に當らぬことやあるべき。判宣サシげにや、現在の果を見て過去未來を知るといふ事、今に知られて身の上に憂き年月のきさらぎや、下の十日の今日の難を逃れつるこそ不思議なれ。判宣唯さながらに十餘人の夢の覺めたる心ちして、互に面を合せつゝ、泣くばかりなるありさまかな。クセ然るに義經、弓馬の家に生れ來て、命を賴朝に奉り、屍を西海の浪に沈め、山野海岸に起きふしあかす武士の鎧の袖枕、かたしく隙も波の上、或時は舟に浮み、風波に身を任せ、或時は、山脊の馬蹄も見えぬ雪のうちに、海少し

ある夕波の立ち來る音や須磨・明石の、とかく三年の程もな
く、敵を亡し靡く世の、其の忠勤も徒になりはつる此の身の、
そも何といへる因果ぞや。判宣げにや思ふ事、かなはねばこ
そ憂世なれと。回知れども、さすが猶思ひかへせば梓弓の
直なる、人は苦しみて讒臣は、彌ましに世にありて、遼遠東南
の雲を起し、西北の雪霜に、責められ埋る憂き身を、ことわり、
給ふべきなるに、唯世には、神も佛もましまさぬかや。怨め
しの憂き世や、あら怨めしのうき世や。ワキいかに誰かある。
狂言御前に候。ワキさても山伏たちに聊爾を申して、餘りに面
目もなく候程に、追つつき申し酒を一つ參らせうずるにて
あるぞ。汝は先へ行きとめ申候へ。狂言畏つて候。いか

に申し候。さきには聊爾を申して餘りに面目もなく候と
て、關守のこれまで酒を持たせて參られて候。シテ言語道斷
の事。やがて御目に懸らうずるにて候。狂言しかじか。シテげ
に、これ心を得たり。人の情の盃に、うけて心をとらむ
とや。これにつきても猶々人に、心なくれそ吳織、怪しめら
るな面々と、辨慶に諫められて、此の山陰の一宿りに、さらり
と圓居して、處も山路の菊の酒を飲まうよ。シテ面白や山水
に、面白や山水に、盃を浮めては、流にひかる、曲水の、手まづ
遮る袖ふれていざや舞を舞はうよ。もとより辨慶は、三塔
の遊僧、舞延年の時の和歌。是なる山水の、落ちて巖に響く
こそ。地鳴るは瀧の水。シテたべ酔ひて候程に、先達お酌に

まゐらうずるにて候。ツキさらばたべ候べし。とても
に先達一さし御まひ候へ。シテ承り候。地鳴るは瀧の水。シテな
るは瀧の水。「日は照るとも、絶えずとうたり。絶えずとう
たり疾くく立てや。手束弓の、心ゆるすな。關守の人々、
暇申してさらばよとて、笈をおつとり、肩にうち懸け、虎の尾
を履み毒蛇の口を、逃れたる心地して、陸奥の國へぞ、下りけ
る。

一六 箱根山

賀茂 眞淵

明けゆくまゝに、けふは富士のねに雲の塵もゐらず、ゆく
見むとて、馬にてぞ過ぐる。古に擬ふる長歌よまむとて、馬

三島
伊豆國、田方
郡に在り。

の上によひつれど、ねむたさに、さだかにも續けられねば、復
こそと思ひて、半ばにてやみぬ。三島に宿りぬ。夜をこめ
て箱根路のぼる。

誰かしる故郷さふる山々を

月に眺むる夜のあはれは

聲さく時
奥山に紅葉ふ
みわけ鳴く鹿
の聲さく時ぞ
秋は悲しき。
(古今集、讀人
知らず)
故郷
遠江を指す。
賀茂眞淵は遠
州の人。

分け入るまゝに、身にしみ返る深山の秋風、鹿の音ながらう
ち吹くめるを、聲さく時ぞとは、かゝる折こそと覺ゆ。此の
山をしも越えれば、故郷は空さへ見えじと思ふに、更に名残覺
ゆるあけがたなり。峠の宿を過ぎゆけば、杉村の小暗きに、
霧たちこめたる袖のしめりもたゞならず。

故郷の空さへ見えぬ箱根山

戸塚
相模鎌倉郡に在り。

品川
武州荏原郡にあり。東京の入口なり。

家持が集
萬葉集は、家持の手を經たるものなりといふ。

こゆる驛のすゝろにぞうき

山々のもみぢ葉色々のゆはたをたち交へたらむが如く、世には染むべくもあらぬ梢ども草の葉さへしぐれあへり。いかで旅ならで見ばやとぞ思ふ。戸塚の宿にやどれり。思ひ續けつる事も、疲れにければ、筆ならで枕をぞとる。十日の晝つ方、品川わたりに到る。はるくと望めば、舟より歩よりつどふもの多かるに、かしこき御勢の仰がれて、旅の疲もおほえず。

大君のとほのみやこの八十の津に

ところせきまでうくたからかな

ふるびにたるかな、家持が集にやいれましとて人々笑ふ。

一七 菅公の左遷

時平のおと
藤原氏。基經の長子。
菅原のおと
道真。是善の子。
みかど云々
醍醐天皇にて御年十三にて御即位。

醍醐の帝の御時、時平のおとど左大臣の位にて、年いと若くておはしき。菅原のおとど右大臣の位にておはします。そのをりみかど御年いと若くおはします。左右大臣に世の政を行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、そのをり左大臣御年二十八九ばかり、右大臣御歳五十七八ばかりにやおはしけむ。ともに世の政うちせしめ給ひし間、右大臣は才も世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきても殊の外にかしこくおはしまし、左大臣は御歳も若く、ざえも殊の外に劣り給へるによりて、右大臣御おほえ殊の外におはしました

昌泰四年
醍醐天皇の年
號。此の年延
喜と改元す。
(二六)

るに、左大臣安からずおぼしたる程に、さるべきにやおはし
けむ、右大臣の御爲によからぬ事出で来て、昌泰四年正月二
十九日太宰權帥になし奉りて、流され給ふ。
この大臣の子ども數多おはせしに、女君だちは塔取し、男君
だちは皆程々につけて位どもおはせしを、それも皆方々に
流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君、女君だち慕ひ
泣きておはしければ、小さはあへなむ」と公も許さしめた
まひしかば、共に率て下り給ひしぞかし。帝の御掟極めて
生憎におはしませば、この御子どもを同じかたにだに遣さ
ざりけり。方々にいと悲しく思し召して、御前の梅の枝を
御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花

あるじなしとて春なわすれそ

亭子の帝
宇多法皇。

又亭子の帝にきこえさせ給ふ。

流れゆくわれは水屑となりはてぬ

君しがらみとなりてとどめよ

山崎
山城乙訓郡に
あり。

なき事により、かく罪せられ給ふをからく思し歎きて、やが
て山崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまゝに、あ
はれに心細くおぼされて、

君がすむ宿の梢をゆくくも

隠るゝまでにかへりみしはや

また播磨の國におはしつきて、明石のうまやといふ處に御

宿りせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて、作らしめ給へる詩いと哀し。

驛長無驚時變改 一榮一落是春秋

かくて筑紫におはしまし著きて、あはれに心細く思さるゝ夕べ、遠方に處々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつけぶり

なげきよりこそ燃えまさりけれ

また雲の浮きて漂ふを御覽じて、

山わかれ飛びゆく雲の歸り來る

かげ見るときぞなほ頼まるゝ

さりともと、世を思しめされけるなべし。月のあかき夜、

海ならずただよふ水の底までも

きよきこゝろは月ぞてらさむ

これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照し給はめとこそはあめれ。

大貳の居所
太宰府。

筑紫におはします所の御門もかためておはします。大貳の居處は遙かなれども、樓の上の瓦などの心にもあらず御覽じやられけるに、又いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の響をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色 觀音寺只聽鐘聲

「これは文集の白居易が、『遺愛寺鐘欵枕聽、香爐峯雪撥簾看。』といふ詩にもまささまに作らしめたまへり。』とこそ、昔の博士

どもは申しけれ。

またかの筑紫にて九月十日菊の花を御覽じけるついでに、
まだ京におはしまし、時、九月の今宵内裏にて菊の宴あり
しに、この大臣作らしめ給へりける詩を、御門かしこく感じ
給ひて御衣たまはせ給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へ
りければ、御覽ずるに、いとどその折思しめしいでて作らせ
給ひける。

去年今夜侍清凉

秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此

捧持毎日拜餘香

この詩いとかしこく、人々感じ申されき。この事ども、只ち
りぢりなるにもあらず、かの筑紫にて作り集めさせ給へり

後集
菅家後集。

けるを書集め、一卷とせしめたまひて後集と名づけられた
り。又折々の歌を書きおかせ給へりけるを、おのづから世
に散りきこえしなり。又雨の降る日うちながめ給ひて、

あめの下かわける程のなればや

著てしぬれぎぬひるよしもなき

やがてかしこにてうせ給へり。

夜の中に、この北野にそこの松をおほさしめたまうて、渡
りすみ給ふこそは、ただいまの北野宮と申して、あら人神に
おはしますすめれ。おほやけも行幸せしめたまふ。いとか
しこくあがめたてまつり給ふめり。筑紫のおはしまし所
は安樂寺といひて、公より別當所司などなさせたまひて、い

北野宮

官幣中社北野
神社、京都の
西北隅にあ
り。

安樂寺

筑前國御笠郡
太宰府村に在
り。

とやむごとなし。(天鏡)

一八 赦文

治承二年
高倉天皇の年
號(六三六)

治承二年正月一日の日、院の御所には拜禮行はれて、四日の日朝覲の行幸ありけり。何事も例に變りたる事はなけれども、去年の夏、新大納言成親の卿以下近習の人々、多く流し失はれし事、法皇御憤未だ止まざれば、世の政事をも、よろづ物憂く思しめして、御快からぬ事どもにてぞ候ひける。太政入道も、多田の藏人行綱が告知らせ奉りて後は、君をも御後めたき事に思ひ奉り、上には事なきやうなれども、下には用心して、苦笑ひてのみぞ候はれける。七日の日、彗星東方

法皇
後白河法皇。

行綱
源氏。

蚩尤氣
支那の黃帝の
時蚩尤叛く、
時に彗星出で
たり。故にい
ふ。

に出づ、蚩尤氣とも申す、又赤氣とも申す。十八日光を益す。入道相國の御女建禮門院、その時は未だ中宮と聞えさせ給ひしが、御惱とて、雲の上、天が下の歎にてぞ候ひける。諸寺に御讀經始り、諸社へ官幣使を立てらる。陰陽術を極め、醫家藥を盡し、大法秘法一つとして残る所なく修せられけり。されども御惱たゞにも渡らせ給はず、御懷妊とぞ聞えし。主上は今年十八、中宮は二十二にならせ給ふ。然れども、未だ皇子も姫宮も出來させ給はず。「若し皇子にてましますば、如何にめでたからむ」と、平家の人々も、只今皇子誕生あるやうに勇み悦びあはれけり。他家の人々も、平氏繁昌折を得たり。皇子御誕生、疑なし」とぞ申し合はれける。御懷妊

定まらせ給ひしかば、入道相國、有驗の高僧貴僧に仰せて、大法秘法を修し、星宿佛菩薩に告げて、皇子御誕生とのみ祈誓せらる。六月一日の日、中宮御着帶ありけり。仁和寺の御室守覺法親王急ぎ御參内ありて、孔雀經の法を以て御加持あり。天台座主覺快法親王、寺の長吏圓慶法親王も、同じく參らせ給ひて、變成男子の法を修せられけり。かゝりし程に、中宮は月の重るに従ひて、御身を苦しくせさせ給ふ。一度笑めば百の媚ありけむ漢の李夫人、照陽殿の病の床もかくやと覺え、唐の揚貴妃、梨花一枝春の雨を帶び、芙蓉の風に萎れつゝ、女郎花の露重げなるより、猶痛はしき御様なり。かゝる御惱の折節に合せて、こはき御物氣ども

讚岐の院

崇徳上皇

宇治の悪左

府

藤原頼長

鬼界が島の

流人ども

平判官康頼、

丹波少將藤原

成經、法性寺

の執行俊寛。

むしよ

墓所。

早良の廢太子

光仁天皇の皇

子、桓武天皇

の皇太子。

數多取り入れ奉る。神子明王の縛にかけて、靈顯れたり。殊に讚岐の院の御靈、宇治の悪左府の御憶念、新大納言成親の卿の死靈、西光法師が惡靈、鬼界が島の流人どもの生靈などぞ申しける。是に因りて生靈をも死靈をも宥めらるべしとて、先づ讚岐の院の御追號ありて、崇徳天皇と號し、宇治の悪左府、贈官贈位行はれて太政大臣正一位を贈らる。勅使は少内記維基とぞ聞えし。件のむしよは大和國添上の郡、河上の村般若野の五三昧なり。保元の秋、掘起して捨てられし後は、死骸道の邊の土となりて、年々にただ春の草のみ繁れり。今勅使尋ね來て、宣命を讀みければ、亡魂尊靈如何に嬉しと思しけむ。されば早良の廢太子をば崇道天皇

井上の内親王

聖武天皇の皇女、光仁天皇の皇后。

元方の民部卿

元方の女村上天皇の更衣となり廣平親王を生む。されど師輔の女、田冷泉天皇、皇位に即せられしを以て元方、憤死せり。桓算供奉は僧の名。供奉は禁中に供奉する僧官。門脇の宰相平教盛。宰相は參議の唐名。

と號し、井上の内親王をば皇后の式位に復す。是皆怨靈を宥められし策とぞ聞えし。怨靈は昔も怖ろしかりし事どもなり。冷泉院の御物狂ほしくましく、花山の法皇の十善の帝位をすべらせ給ひしは、元方の民部卿が靈なり。又三條の院の御目も御覽ぜられざりしは、桓算供奉が靈とかや。門脇の宰相かやうの事どもを傳へ聞き給ひて、小松殿に申されけるは、今度中宮御産の御祈様々に候なり。何と申すとも非常の赦に過ぎたる程の事有るべしとも覺え候はず。中にも鬼界が島の流人どもを、召還されたらむほどの功德善根何事か候べき。と申されたりければ、父の禪門の御前におはして、あの丹波の少將がことを門脇の宰相餘り

に嘆き申すが不愼に候。殊更中宮御惱の御事、承り及ぶ如くんば、成親卿が死靈など聞えて候。大納言が死靈を宥めむと思しめさむにつけては、生きて候少將を召しこそ還され候はめ。人の思をやめさせ給は、思しめす事も叶ひ、人の願を叶へさせましまさば、御願も則ち成就して、御産平安皇子御誕生ありて、家門の榮花益盛に候べし。など申されければ、入道相國、日比より事の外に和きて、俊寛や、康頼法師が事は、如何に。と宣へば、それも同じくは召しこそ還され候はめ。若し一人も殘されたらむは、中々罪業たるべく候。と申されたりければ、入道相國、康頼法師が事はさることなれども、俊寛は隨分入道が口入を以て、人となしたる者ぞかし。

それに所しもこそ多けれ、東山鹿の谷我が山庄に寄りあひて、奇怪の振舞どもがありけむなれば、俊寛が事は思ひも寄らず。」とぞ宣ひける。

大臣歸りて、叔父の宰相を呼び奉りて、少將は既に赦免あるべきにて候ぞ。御心安く思し召され候へ。」と申されたりければ、宰相聞きもあへ給はず、泣くく手を合せてぞ悦ばれける。「下り候ひし時も、是程の事などや申し受けざらむと思ひたりげにて、教盛を見候度毎に、涙を流し候ひしが不愼に候。」とぞ申されける。小松殿誠にさこそは思し召され候らめ。子は誰とても悲しければ、よくく申し候はむ。」とて入りたまひぬ。さるほどに鬼界が島の流人どもの召還さ

るべき事定まりしかば、入道相國の赦文書きてぞたうでける。御使既に都を立つ。宰相餘りの嬉しさに、御使に私の使を添へてぞ下されける。「夜を書にして急ぎ下れ。」とありしかども、心に任せぬ海路なれば、波風を凌いで行く程に、都をば七月下旬に出でたれども、九月二十日比にぞ鬼界が島には着きにける。(平家物語)

一九 鬼界が嶋

御使は丹左衛門の尉基康といふ者なり。急ぎ船より上り、「是に都より流され給ひたりし平判官康頼入道・丹波の少將殿やおはす。」と、聲々にぞ尋ねける。二人の人々は、例の熊野

詣してなかりけり。俊寛一人ありけるが、是を聞きて、餘りに思へば夢やらむ。又天魔破句の我が心を誑さむとていふやらむ。現とも更に覚えぬ者哉。とてあわてふためき、走るともなく倒るゝともなく、急ぎ御使の前に行向ひ、是こそ流されたる俊寛よ。」と名乗り給へば、雑色が頸に懸けさせたる布袋より、入道相國の赦文を取出て奉る。是をあけて見給ふに、重科は遠流に免ず、早く歸洛の思をなすべし。今度中宮御産の御祈によりて、非常の赦行はる。然る間、鬼界が島の流人、少將成經、康頼法師、赦免」とばかり書かれて、俊寛といふ文字なし。禮紙にぞあるらむとて、禮紙を見るにも見えぬ。奥より端へ読み、端より奥へ読みけれども、二人とばかり

書かれて三人とは書かれず。さる程に少將や、康頼法師も出で來り、少將の取りて見るにも、康頼法師が読みけるにも、二人とばかり書かれて、三人とはかゝれざりけり。夢にこそかゝることはあれ、夢かと思ひなさむとすれば現なり。現かと思へば又夢の如し。其の上二人の人々の許へは、都より言傳てたる文ども、幾らもありけれども、俊寛僧都の許へは、事問ふ文一つもなし。されば我が縁の者どもは皆都の内に跡を止めずなりにけるよ、と思ひ遣るだに覺束なし。抑、我等三人は同じ罪、配所も同じ所なり。如何なれば赦免の時、二人は召還されて、一人こゝに残すべき。平家の思ひ忘れかや、執筆のあやまりか、こは如何したる事どもぞや。」と、

故大納言殿
藤原成親。

天に仰ぎ地に伏して、泣き悲しめども甲斐ぞなき。僧都、少將の袂にすがり、俊寛が斯様になるといふも、御邊の父、故大納言殿の、よしなき謀叛の故なり。されば他所の事と思ひ給ふべからず。赦されなければ、都までこそ叶はずとも、せめては此の船に乗せて、九國の地まで着けて給べ。各、是におはしつる程こそ、春は燕、秋は田の面の雁の音づるゝやうに、おのづから故郷の事をも傳へ聞きつれ、今より後は何としてか聞くべき。とて、悶え焦れ給ひけり。少將、誠にさこそは思しめされ候らめ。我等が召還さるゝ嬉しさも、さることにては候へども、御有様を見奉るに、更に行くべき空も覺え候はず。此の船に打乗せ奉りて、上りたくは候へども、都

の御使如何にも叶ふまじき由を頻に申す。その上赦されもなきに、三人ながら島の内を出でたりなど聞え候はゞ、中々悪しく候ひなむす。成經先づ罷り上りて、人々にもよく申し合せ、入道相國の氣色をも伺ひ、迎に人を奉らむ。其の程は日頃おはしつるやうに思ひなして待ち給へ。命は如何にも大切のことなれば、假令此の瀬にてこそ洩れさせ給ふとも、終にはなか赦免なくて候べき。と、やうく慰め宣へども、僧都堪へ忍ぶべくも見え給はず。さるほどに、船出さむとしければ、僧都船に乗りては下りつ、下りては乗りつ、あらまし事をぞし給ひける。少將の形見には、夜の衾、康頼入道が形見には、一部の法花經をぞ止めけ

る。既に纜解きて船おし出せば、僧都船に取りつき、腰になり脇になり、丈の立つまでは引かれて出づ。丈も及ばずなりければ、僧都舟に取りつき、さて各、俊寛をば、終に捨てはて給ふか。日頃の情も今は何ならず。赦されなければ、都までこそ叶はずとも、せめてこの船に乗せて、九國の地まで。」と口説かれけれども、都の御使、如何にもかなひ候まじとて、取付き給ひつる手を引きのけて、船をば、終に漕ぎいだす。僧都せむ方なさに渚に上り、倒れ伏し、稚きものの、乳母や母などを慕ふやうに足摺をして、「これ乗せて行け、具して行け。」と宣ひて、をめき叫び給へども、漕ぎゆく船の習ひにて、跡は白波ばかりなり。未だ遠からぬ船なれども、涙に暮れて見え

そらうりそ
くりが云々
印度の昔話に
壯里、息里の
兄弟、繼母の
爲に追放せら
れたりとの事
あり。

ざりければ、僧都高所に走り上り、沖の方をぞ招きける。かの松浦小夜姫が唐船を慕ひつゝ、領巾振りけむも、是には過ぎじとぞ見えし。

さる程に船も漕ぎ隠れ、日も暮るれども、僧都あやしの臥處へも歸らず、波に足打洗はせ、露に萎れて、其の夜は其處にて明しける。「さりとも、少將は情深き人なれば、能き様に申す事もや。」とたのみを懸けて、其の瀬に身をも投げざりし心中こそはかなけれ。昔^{*}そらうりそくりが、海巖山へ放たれたりけむかなしみも、今こそ思ひ知られけれ。(平家物語)

二〇 學制に關する意見書 橋本景岳

明道館御取立之義は深き思召も在らせられ、政教一致文武不岐と申す御標準にて、後々は士大夫仁讓節烈の風に興り、庶民時雍文化に移り候様、年來御勞思被遊候御大願、御鴻業は、明道館中より御成就の基趾を開き候様にとの御趣意に御坐候様に奉欽承居候。右は中々尋常容易の御趣向にては無御坐、實に古今之聖主賢輔も難んじ居られ候義に御坐候へば、御處置の次第に於て、先づ宏遠明確の御定案相定まり居候うて、一切模稜安排之御仕向等御脱却無御坐候はては、逆も御満願の期有之間敷奉存候。儲愈、右の御趣意に相極り候上は、人材を得るの道を開き候事、肝要に奉愚考候。大抵人材を得るには、四箇條の要件御座候者にて、此を盡さ

ずして材を得むとするは、夜行して日を見むと思ふ者と同様の愚と申すべく奉存候。四箇條の要件と申候は、第一材を知るの道、即ち其の人の長ずる所を知りて、又其の短なる處をも看破致し居候事。第二材を養ふの道。已に其の材を知り候は、又之を生育長養して、害を避けしめ、難を去らしめ、且其の支拮扞格の患を除くの術を盡して、其の志を遂ぐる事を得しめ候事。第三材を成すの道。之を養ふの方既に具らば、之に藝を教へ學を植ゑ、其を正道に誘き、實事に試み、遂に其の材を練熟して有用の者とならしむる事。第四に材を取るの道。材既に用に堪ふるの地に到り候はば、久しく下に淹滯廢棄致させ申さず、其を朝に薦めて其の堪

ふべき處の任に當らしむべき事。此の四道を兼ね行はざれば、材を得るの道は盡き申さず候。

四道の内に於ても、知材・成材の二道を盡し候事最も難しと奉存候。其の仔細は、千里の馬は必ず蹠嚙の病ありて、跡弛の士には、必ず負俗の累御坐候事、今古の通患に御坐候上、兎角衰世の風儀、迂俗の舊習にて、怠懦畏怯、平弱柔媚の性質は大抵人にも被愛、其の上目立ちたる過失もなき様に相見え候へ共、此等の輩は皆一生己が爲にする貪利と申す病根全治不仕者にて、學問に熟し候程面諛遁辭に長じ、古人の所謂郷愿なるものに陥り、中々安心して倚頼すべき者にては無御坐候。其に引替へ、豪放磊落、跌蕩不羈、純正剛毅、果烈狷介

の性質こそ、末頼母しく被思候。併し此等の人物は、生來人に傑出致し居候者故、自分に恃む處ありて、人に就き人に屈し申さず、動もすれば庸人を輕蔑し、衆論に牴觸する患御坐候者にて、即ち古より英雄・豪傑の人毎度危禍に出遇候は、畢竟此に根ざし候事に御座候。右様の性質に御座候故、兎角節を折き、書を読み理を講ずる等の事は好み申さず、學問は厭棄致し易くして、度外に放擲候弊も往々有之候へども、如何に豪放・磊落・剛毅・狷介なればとて、道理に熟せず、學術に明かならずしては、大節義・大機略を具へ、大作用・大處置を仕出來し候義、甚だ以て無覺束奉存候。此等の人物を誘導して、之を心折せしめ、之に學を積ませ、藝術を磨磨致させ候うて

こそ、國家の御有用にも相成り、學問の光も顯れ可申奉存候。左なくして局々猥瑣の人物に、小廉曲謹だけ教へ込み候は、小人の腹赤なる上に、表飾の道具を爲添候迄にて、外に益もなき義學問と申す者は世に在る方、結局害と相成可申候。文武一致の御趣意に候故、今般武藝所御取立に相成り、造士の方に於ては次第に其の具備り、有難き御仕向に御座候。古來より迂儒の陋見にて、兎角技藝を卑視して、之を力修する者を譏嘲致し候。是誠に蒙昧不通の論に御座候。聖人の道と申すも、畢竟人倫日用の外には無之候へば、物外の道にてはなし、物外の道ならねば事を離れ候事は無之筈にて、所詮道は却つて、技よりして進入候者と愚考仕候。然るに

己の不能拙劣を掩ふ爲、徒に空理の談を喜び、著實の技藝を嫌ひ候は、可笑の至に御坐候。古より聖賢の無能なる者一も有之候様相見え不申候。聖賢と申すは多能にして、能を頼まず能に伐らず、技藝を修めて技藝に局せず、技藝の中に於て妙理の存する所を知り、衆藝の要一致に湊會する處に覺有之人と被考申候。

將又人材を得候は、唯教育薰陶の上に有之のみならず、又其の材を取りて其の長を爲展、併せて傍人をして觀感憤起せしめ、汚下に安んぜざらしむるの術亦肝要と奉存候。凡て人材は經世の藥石に御坐候へば、時態に依りて選舉の致し振り少々づゝ相變り、或は正直剛果を重んじ、或は機敏捷給

を主とし、或は道德を先にし、或は氣槩を擇み候様の小差は可有之候へども、究竟忠義の士有用の材を採り候より外は無之して、其の能は、文武兼備は勿論、或は一方に長け候者にも、随分有用の材と申者可有之候。西土は從來文を貴び候國にて、文官を高くして政權を執らせ候故、文士中より非常の人材も出、經濟有用の大業を成し候に付、世の儒生輩、兎角學者さへ相用ひ候へば、國は治り候様心得居申候へども、此は拘泥の甚だしき義に御坐候。本朝は元來武を重んぜられ、御政體も武斷を尙ばれ候御風儀に御坐候うて、習俗も勁簡を喜び、繁縟を好不申、何れの代にも、武林より往々忠亮明快、廉潔剛正、百里の命を寄せ、六尺の孤をも託すべき人物

輩出仕候事自然の勢にて、西土と同じからざる譯も數々御座候へども、當時の如く、世風追、打開け人心伶明に相成候上は、政權は自ら學術ありて道理に純熟致し候者に歸すべきは、此亦自然の勢に御坐候。以上の條件四綱にして、其の要は人材を知り、之を養ひ、之を成し、之を取るの道に止り申候。此の四綱に於て宏遠の御規模、明確の御猷謨、粗、相定まり候うて、御施設の御修理井然立居り申さず候はでは、前件の御大願御大業御成就の程甚だ以て無覺束奉存候。畢竟四綱の不立は、全く三弊の脱せざるに依り、三弊の脱せざるは志不遠大、學術不純正に因り候義に御坐候。

當今の如く廓然御打明け御熟評御坐候上は、小臣抔庸劣愚直の者、唯隆恩感荷の情に盲らみ、聲情稔熟の際に泥み、凜冽の氣挫屈仕り、蹇諤の風袪致候義相覺え候事も御坐候。箇様成り行き候うては、稽衆從人の御美事よりして、反て面從莫逆の邪徑を誘出し、上下共公平の心にて忠論讜言盡し候様不被存、篤と省察仕候へば、聖賢相與に警戒する旨に乖き、國家御善政の御德輝を毀損仕候はむ歟と、深く恐怖仕候義に御坐候故唐突不敬の譏を不顧、尊嚴の御威光をも不懼、叨りに冗語贅說拜陳仕候。臣紀頓首々々、誠恐謹言。

安政四丁巳閏五月十五日

(橋本佐内全集)

二一 萬里の長城

土井 晚翠

一

生ける歴史か數ふれば

齡は高し二千年

影は萬里の空遠き

名も長城の壁の上

落日低く雲淡く

關山看すく暮れんとす

征驂悵み留りて

俯仰の遊子身はひとり

絶域花は稀ながら

平蕪の緑今深し

春乾坤に回りては

霞まぬ空も無かりけり

天地の色は老いずして

人間の世は移ろふを

歌ふか高く大空に

姿は見えぬ夕雲雀

嗚呼跡ふりぬ人去りぬ

歳は流れぬ千載の

昔に返り何の地か
残壘破壁聲も無し

春朦朧のたゞ中に

かれ秦皇の覇圖を見ん
恨も暗し夕まぐれ
俯仰の遊子身はひとり

二

三皇五帝あと遠く

六王終りて四海一

四海の黔首ひれふして

雷霆の威に聲もなし

わが宮殿を高うせよ

一たび呼べば阿房宮

わが邊境を固うせよ

二たび呼べば萬里城

春は驪山の花深く

秋は上郡の雲暗く

管絃響き雲に入る

舞殿の春の夕まぐれ

袂を舉げて軽く起つ

三千の宮女花のごと

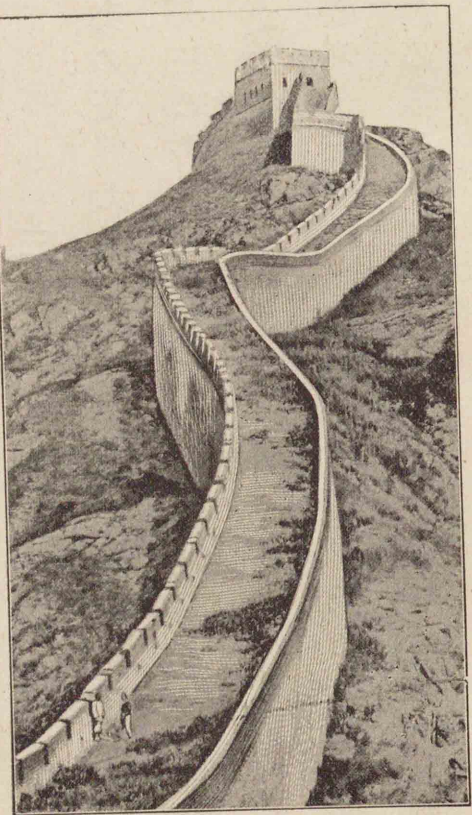
六王終りて
云々
杜牧之の阿房
宮賦に「六王
畢四海一、蜀
山元阿房出。」

花を散らして玉觥に

浮かす歌扇の風もよし

彫龍の欄奥深く

薫る蘭麝の香を高み



萬里長城

珠簾を洩るゝ銀燭の

光消えなで夜や明けん

西臨洮の嶺高し

こゝ遼東の豁深し

流を埋め山を截り

壘を連ぬる幾千里

かゝりの焰天を焼き

つるぎの光霜凍り

殺氣夏尙ものすごく

守るは猛士二十萬

漢のこなたに胡茄絶えて

匈奴の跡ぞ遠ざかる

三

北夷の憂絶え果て、

境は堅し國安し

先王の書も焚け果てぬ

天下の儒者も埋まりぬ

わが萬世の業成りぬ

君主の思しかなりき

知るや夜半の阿房宮

後庭深く森暗く

歌臺の響よそにして

獨り嵐のつぶやきを

浮世の花の一盛り

褪むるに早き色見ずや

聞け長城の秋の營

旌旗の暗に消ゆるとき

また、く光露帯びて

星の竊かにさゝやくを

富も力も一場の

夢覺め果てん後思へ

四

春靜かなる東海の上

緑を涵す波の上

不死の金闕遠くして

童女五百の舟いつこ

絳霞の光天上の

花とこしへに匂へども

土に下れば沉溼の

示すは獨り世の脆さ

至尊の榮は高くとも

名を玉籍に留め得じ

金人十二鑄なせども

彼に無象の劔あり

心を焦し身を碎く

あゝ韓朝の一孤臣

爾の策は成らずとも

無常の風は荒かりき

春靜か云々
始皇帝二十八年、徐市等をして童男童女五百人を率ゐて東海に行きて不死の薬を求めしむ。

韓朝の一孤臣云々
張良博浪沙にて秦皇に鐵椎

を抛つ。過つて副車に中つ。
無常の風云々

始皇三十七年、田遊して病み、砂丘の平臺に崩す。秘して喪を發せず、輻輳車中に載せ一石の鮑魚を以て其の臭を亂る。

民の怒云々
阿房宮賦に「獨夫之心日益強固成卒叫函谷舉、楚人一炬、可憐焦土。」
霧れざる云々

同賦に「長橋臥波、未雲何龍、復道行空、不舞何虹」

天地靜かに夜は更けて

流れは咽ぶ秋の聲

思ふやいかに人力の

鐵椎血無し博浪沙

五

嗚呼死屍未だ冷えずして

暗君嗣ぎて上に在り

民の怒は火の如く

楚人の一炬閃きて

霧れざる空に虹懸けし

雲あらざるに龍飛べる

獨り圮橋のかたほとり

燃ゆる心も靜まりて

脆きを命の定まりと

鮑魚臭有り沙丘臺

かれ萬世の業いづこ

佞豎の害のなどあらき

成卒は叫び兵は起ち

咸陽の宮皆焦土

復道の跡今いづれ

長橋の影はたいかに

衰蘭露に悲しめば

驪山の麓春去れば

斬蛇のつるぎ炎精の

甘泉殿の夜半の月

其の移り行く世の習

邊土に立てる長城の

六

邦は亡びて邦に嗣ぎ

鼎は移る朝二十

中華幾たび烽舉り

又越え去りし國民の

遺宮空しく草の宿

花ことごとく涙あり

光もさはれ極みあり

かれも浮雲の恨あり

二京の花をよそにして

連雲の影あゝ絶えず

人は代りて人を追ふ

歳は流るゝ曆二千

長城の壁越え來り

數さへいかに世々の跡

斬蛇のつるぎ云々
漢の高祖嘗て夜、澤中を徑す。大蛇あり徑に當る、劍を抜きて之を斬る。老嫗哭して曰く吾は白帝の子なり、今赤帝の子之を斬ると。

山川影は替らねど

春夢空しく跡もなし

群雄の覇圖いたづらに

残すは獨り史上の名

獨り邊土に影絶えず

齡重ねて二千歳

殘壘苔に今青む

長城の影尊しや

民の膏血世の笑

逆政の形見それながら

歴史の色に染められし

萬里の影ぞ懐かしき

其の面影に忍びでゝ

泣くは懐古の露のみか

暮春の恨誰がために

霞も咽ぶ夕まぐれ

七

霞も咽ぶ夕まぐれ

遊子俯仰の物思ひ

北夷禦ぎし長城の

昔の跡は替らねど

時世空しく流れては

中華の姿あすいかに

秦漢魏晉移り行く

昔の跡を引換へて

西の嵐のふき寄する

黄海の波今あらし

西曆一千九百年

東亞の嵐あすいかに

中華の光先王の

道この民を救ひ得じ

愛を四海に傳ふべき

神人の教いま空語

看ずや豺狼の慾飽かて

基督教徒血をすゝり

群羊守る力無く

異教の民の聲吞むを

俯仰古今の物思ひ

遊子の恨いつ盡きん

征驂恨み嘶ける

響を返す壁のもと

思ひも遠く眺むれば

霞たゞよふ大空の

自然の樂も絶え果てつ
恨を含む長城の

關山暮れて星出で、
姿は暗に吞まれ行く

八

さらば別れんとこしへに

わが長城の壁のもと

盡きぬ思は大空の

星の光に任せ置きて

其の星移る千載の

時の流の末遠み

替らで影を尙とめん

殘壘にまた忍びで、

我が世の今日を謠ふべき

後の詩人はわれ知らず

嗚呼永劫の脈搏は

何れの時か絶え果てん

人生舊を傷みては

千古替らぬ情の歌

破壁聲無き傍に

また落日の影を帯び

流るゝ光積り行く

三千の昔忍ぶ時

かれ永遠の聲擧げて

何の國語に謠ふらん

興廢移り悲喜まじる

一人の跡一國の跡

笑の蔭に涙あり

暗のあなたに光あり

玉樓の花風恨み

殘壘の嵐天の樂

嗚呼千載の後の世の

詩人よ既に君の歌

今も響けり長城の

暗に隠るゝ壁の中 (曉鐘)

二二 曾我會稽山その一

近松 門左衛門

裾野の御狩の御遊、鎌倉の騷動にて急ぎ歸御有るべしとの、
時刻も雨に事延びて、假屋の騒ぎもいつしかに、辻の篝も影

薄く、晝の疲れの手枕に、短き夜半を鐘の聲、夢より夢を結びける。時節よしと曾我殿原、鬼王兄弟を古郷へ返し、出て立つ祐成が装束は、母上より給はりし秋の野に草盡し縫ひたる練貫の單ぎぬ、村千鳥の直垂の袖を結んで肩にかけ、黒鞘卷の太刀を佩き、竹の子笠の紐強く、上に下部の青合羽、陣松明に道照らさせ、先に進めば五郎時致、是も母より給はつたる白綾に鶴の丸縫ひたる袷衣、揚羽の蝶の直垂、赤木の柄の腰ざし、別當より給はつたる源氏重代友切丸、肩に打かけ紙合羽しめたる笠の怯れじと、跡に續いて立出てたり。

「いかに時致、母の御恩を徒に今宵敵を討たずんば、不孝といひ世の人口、生きてる甲斐も有るまじきに、天の恵みか

降る雨に、御寮の御立は延引す。狩場の用意も事靜まる。殊には蒲の入道殿貸し給はつたる此の割符。頼朝公の膝元へ通路自由と聞くなれば、祐經を討つは案の内。假屋には定めて遊女數多有るべきぞ。罪作りに手な負はせそ。雨はいつも降りながら、今宵の雨ぞ身には染む。討死せしと聞えなば、思ひ切つたる御心にも、母の歎はいか計り。悲しさよ。」

「仰にや及ぶべき。祐經は籠中の鳥網代の魚、やはか洩らし候べき。恐らくは此の時致、天魔破旬に出合ふとも、ちつとも怯まぬ魂。今宵の雨は身に掛り、ぞつこん徹つてわぢわぢと物悲しう罷成る。敵に出合ひ働かば、所々の

死を遂げむも計られず。最期の盃一つ飲うで給はれ。」
腰に付けたる懸烏帽子に、降りくる雨を受け溜めて、祐成が
手に渡せば、

「なう七度結んで兄と成り、六度契りて弟と成ると傳へ聞
く。死替り兄弟の縁は切るまじ。」

とさらりと飲^ホして指しければ、時致とつて押戴き、

「兄は親にて候へば、母うへの御盃も是に籠り、天の甘露仙
家の醬^{コシ}、此の酒に勝らむや。」

と受けては飲み受けては飲み、降りくる雨は恩愛の親と妻
との血の涙、親子夫婦の血を飲むと思ひ知らぬぞ哀なる。

五月雨の一頻りをだゆみて、空さりげなく晴々と北斗の光

鮮かに晴渡れば、安西の彌七郎、新開の荒四郎、旅装束に下部
を引具し、雨も晴れて候ぞ、君は明日五つの御發駕。先手は
追付けお立の御用意。」と呼ばらせ打つて通る。兄弟はつと
顔見合せ、「此の騒に亂れ入り、討つて本望達せむ。」と袖摺違へ
駈通る。

「こりやく、何奴なれば御假屋の傍近く、斷りもなく
忍び行く。馬盗人か盜賊か、それ搦めよ。」

とひしめけば、祐成騒がず、

「いや苦しからず。鎌倉より祐經殿へ密々の御用の使。
咎め立してかたがたが所領の仇ばしし給ふな。疑はし
くば見られよ。」

と首に掛けたる通路の割符「是見られよ」と指出す。兩人恟り詞を替へ、存ぜぬ事とて雑言申せし御免有れ。新開、安西咎めたりとは祐經殿へは必ず沙汰なしに頼み入る。假屋へは此の辻を左へきれ、行當りの大構、いざ御通り候へ。」と馬鹿慙懃の空輕薄、結句敵の引入を仕濟まし顔に別れける。

二三 曾我會稽山その二

兄弟遁るゝ鰐の口、虎の威を借る此の割符、蒲殿の御恩ぞと、御寮の假屋の傍近く、忍び入るこそ危けれ。右左の假屋騒ぎ立ち、お先手は發足の御觸有り。合羽は取置き、腰錢を取落すな。馬よ鞍よ。」と犇けば、兄弟彌、氣も急が

れ、

「祐經が假屋とてもさぞ有らむ。是迄忍びし甲斐もなく、此の雨の降り止む事、神明にも見放され、よくく武運に盡きしか。」

と拳を握り齒を鳴らし、虚空を白眼んで立つたる所、秩父の執權本田の次郎近經、小具足に身をかため、本陣の夜廻りしてけるが、曾我殿原と見るよりも近々と歩みくる。

兄弟「誰ぞ。」と咎むれば、波に揺らるゝ沖津船。知邊の磯は此方ぞ。」と囁く聲に祐成はつと嬉しく、

「重忠公の御情、又は御身の御懇情、此の度に限らねども御禮申す事もなく、禮儀知らずとや思されむ。今宵年來の

大望達せむと存ずる所、俄かに雨晴れ、假屋々々は出足の用意。此の騒には覺束なし。此の儘歸つていつの時をか期すべき。無二無三に切込んで、兄弟屍を晒す所存。重忠公へ一生積る御禮は貴殿の執りなし頼み入る。」と云ひければ、兄弟が耳に口を寄せ、

「氣遣ひばしし給ふな。祐經は明日君の御馬の御供。それ故假屋も寢靜まる。こなたへく、靜かに。」

と道の案内の杖柱、嬉しさ類ひはなかりけり。

「是こそ祐經が臥床なり。心靜かに本意を遂げ、會稽の耻を雪がれよ。」

「御案内の程五百生の體を焼くとも、いかでか報じ盡すべ

き。随つて通路の此の割符、蒲の入道殿より、密かに拜借申せしかど、御切腹の跡なれば、返辨申さむ様もなし。我が死體にあれば、蒲殿こそ御勘氣の伊東が末の曾我に組し、反逆の族よと、死後の虚名に御骸を瀆さむ事、御恩を却つて仇にて報ずる道理。近經殿に預け置く、然るべく頼み存ずる。」

と二枚の小札を手に渡せば、

「尤もく。近經に任されよ。主人重忠悪くは計らひ申されまじ。老母の事もゆめく、鹿略候まじ。今暫くと存ずれども、役目なれば知らぬ顔。弓矢の禮儀是迄。」

と本田は假屋に入りけり。

「今は何をか期すべき。」と兄弟合羽かなぐり捨て、本田が教へし敵の假屋は是なりと、木戸・駒寄を飛越え、跳越え、兄弟莞爾と打笑ひ、天にも上る心地にて、難なく臥床に討つて入る。次に伏したる宿直の侍、足音に目を覺し、すは盗人よ。」と呼ばはつて逃げいづる。假屋くゝに聞きつけて、そりや盗人よ、御立よ。」と騒の上にまた混亂。相圖響かす大鼓・鉦、かんくどんくゝどんくさい。又雨が延びて來た、お立が降ると入るも有り。雨の足音さつさつさ。人の足音どろくゝくゝ。右往左往にもてかへす。其の隙に兄弟は敵工藤祐經を思の儘に討負せ、門外に走り出で、袂を絞つて喉を濕し、勢ひ猛に立つたりし心の内こそ嬉しけれ。

「え、心地よい時致。年月の思にくらぶれば、敵を討つは易かりしな。餘り嬉しさ心急いで忘れしが、祐經に止め刺しつるか。」

「あれ程に切る上はなんの仔細か候べき。」

「いや然はなし。跡にて實檢有らむ時、敵を討つたれども止めを刺さぬは狼狽へたりと云はれむは、骸の上の耻辱ぞかし。五郎如何に。」

と有りければ、尤も」と打領き、誰をか恐れ忍ぶべき。のつさのつさ假屋の歩み板ぐはつたく踏鳴して引返し、障子・襖はらくと蹴放し、祐經が死骸にどうと跨り、
「能つく聞け祐經。一念の瞋恚に依つて敵と成り味方と

成る。六根の罪障消滅し、不退の彼岸に到れよ。」
と腰の指添を抜き、

「そも此の刀は箱根にて初めて見参したる時、得させたる
赤木の小刀。御邊元の主なれば鐵の味は知りつらむ。
只今返す受取れ。」

と右手の耳の下よりもゆん手へ通れと刺す程に、耳と口と
を一蓮托生。「南無阿彌陀佛」と回向して元の所へ立歸るに、
手指す者さへなかりけり。
祐成待受け、

「落ちば此の儘落つべけれども、隠れ忍んで一生を暮さむ
は生きたる甲斐は有るまじ。一足にても逃ぐるとは弓

矢の耻辱。殊更我々故に御生害有る蒲殿の御恩、御供申
さで叶はぬ命。浪人の我々が靖太刀と、奉公日の出の殿
ばらが、刃を試して討死せむ。」

「尤も」と二人等しく大音上げ、

「伊豆の國の住人伊東の次郎祐親が孫、河津の三郎が二人
の子、曾我の十郎祐成、同じく五郎時致、親の敵工藤左衛門
祐經を討留めたり。頼朝公の御内に弓取はなきか。折
合ひて打留めよ。」

闇さは暗し、雨は降る。假屋くゝに「すは夜討」と弓一挺太刀
一振に、五人三人取附いて、「我よ人よ」と奪ひあひ、繋ぎ馬に鞭
打つて遅しとあせる所も有り。鎧に亡り兜に躓き、小手を

臚當草鞋を笠上を下へと袴けば、御馬屋の徳竹大聲上げ、

「物の黑白も見えざるに松明出せ。」

と呼ばはれば、二千軒の假屋より、箆・鞞・簀笠・傘・箒に至る迄、火を付けて投出す。裾野の暗は忽ちに、百千の朝日影、一度に照す如くなり。(曾我會稽山)

二四 大日本史論贊

一 楠正成贊

贊に曰く、楠正成の兵を用ふる、機を決し勝を制するは、孫吳に髣髴たり。而して忠勇壯烈なるは、殆ど唐の張巡と相似たり。巡は雍丘を出でて睢陽を守り、正成は赤阪を去つて

千劔破に據れり。皆孤墉に嬰つて賊の喉牙を鯁す。韓愈の謂はゆる、千百盡くるになんなんたる卒を以て、百萬日に滋きの師と戦ふものなり。寡を以て衆を撃ち、奇を出して窮り無し。藁人、敵を誘ふ如きに至つては、則ち姑く論ぜずして可なり。巡は城陥りて死し、正成は鑿輿を奉迎し、首として推奨を蒙る。これ則ち異なりと爲す。而れども廟謨臧からず、元兇踵を接し、主驕り臣諛ひ、老成持重の計を用ひず、自ら萬里の長城を壊りて、以て強敵の勢を成し、中興の業此より去れり。嘆ずるに勝ふ可けんや。湊川の戦に、正成將に自殺せんとす。正季が生に託して敵を滅さんと欲するの語を聞き、笑を含んで地に入る。其の巡の死に臨んで、

厲鬼と爲り以て賊を殺さんことを誓ふに視るに、又何ぞ相似たるや。これ其の忠義の心、天地を窮め萬古に亙つて滅す可からず。身死すと雖も、而れども死せざるもの、固より自若たり。正行遺託を受け、能く義旗を建て、始終節を一にし、死を以て國に報ず。忠孝兩つながら全しと謂ふ可し。宗黨疏屬に至るまで、皆能く力戦して節に死し、闔門忠義の鬼と爲る。豈正成が教導訓練の效に非ざらんや。

二 義烈傳序

孔子曰く、「志士は溝壑に在るを忘れず。勇士は其の元を喪ふを忘れず」と。夫れ人の位に居て、人の祿を食む。國家に難あらば、則ち軀を捐て節に徇ずる、固より其の所なり。死

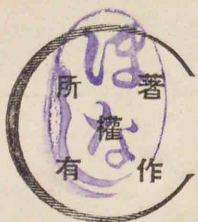
するに其の所を得ば、則ち欲する所生より甚だしきこと有り。故に忠臣義士は、生を捨て、義を取り、身を殺して仁を成す者あり。其の精英忠烈の氣、宇宙の間に磅礴し、坤軸を幹し、乾樞を撼かし、萬世に亙つて泯ぶ可からず。皆以て其の志を持すること有るなり。國朝風氣剛勁にして、敦く廉恥を尙び、武夫悍將、愷を立て、寇を怒り、難に臨み、苟も免れずして、死を視ること歸するが如き者、世々人に乏しからず。其の慷慨壯烈、一に天性より出で、之を講じて素あり、之を處して道あるに非ざるなり。皆造次顛沛の際に於て、決然之を行つて疑はず。史傳に所謂、誠節忠義なる者と符節を合するが若し。蓋し綱常倫理は、一日も已む容からざるもの

にして、天に稟けて己に存するなり。儻し能く之をして聖賢の道を講習し、暇日其の孝悌忠信を修め、大節に仗りて仁義を踏ましめば、則ち其の美を成就して、史冊を光耀するもの、豈是の如きのみに止らんや。越後能景、大河兼任は、犬吠して主を非り、訓と爲す可からずと雖も、疾風の勁草にして事ふる所に忠なれば、則ち取る可きことあり。義烈傳を作る。(大日本史論叢集)

大正國語讀本 卷十終

大正五年九月廿五日印
 大正五年九月廿八日發行
 大正五年十二月廿二日訂正印刷
 大正五年十二月廿五日訂正發行

大正國語讀本 全拾册	
卷一・二	各金參拾四錢
卷三・四	各金參拾貳錢
自卷五至卷十	各金參拾錢



保科孝一
 東京市麹町區土手三番町三十六番地
 合資會社 育英書院
 右代表者
 目黒甚七
 東京市京橋區西紺屋町二十七番地
 佐久間衡治

株式會社 育英書院 印刷所

發行所
 發賣所

東京市牛込區白銀町二十番地
 振替口座(東京)七四二番
 東京市京橋區南傳馬町二丁目
 振替口座(東京)二八〇九番

合資會社 育英書院
 目黒書店

